

# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、立体交差事業にともなう常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

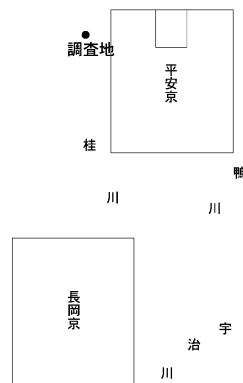
平成 20 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦一ノ井町・太秦東蜂岡町
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2008年4月9日～2008年6月27日
- 5 調査面積 約1360㎡
- 6 調査担当者 前田義明・尾藤徳行・小松武彦
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 遺構番号は4区と5区に分け通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書執筆 前田義明・尾藤徳行・小松武彦  
付章：北野信彦
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺跡の位置と周辺の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 4区の遺構	7
(3) 5区の遺構	13
4. 遺 物	22
(1) 4区の出土土器	22
(2) 5区の出土土器	25
(3) 出土瓦	30
(4) その他の遺物	33
5. ま と め	34
6. 付章 出土ガラス製品の分析結果報告	38

# 図 版 目 次

図版1	遺構	4-1区遺構実測図、4-2区遺構実測図1 (1:200)
図版2	遺構	4-2区遺構実測図2 (1:200)
図版3	遺構	4-2区遺構実測図3 (1:200)
図版4	遺構	5-1区遺構実測図1 (1:200)
図版5	遺構	5-1区遺構実測図2 (1:200)
図版6	遺構	5-1区遺構実測図3 (1:200)
図版7	遺構	5-1区遺構実測図4 (1:200)
図版8	遺構	5-2区遺構実測図 (1:200)
図版9	遺構	5-3区遺構実測図 (1:200)
図版10	遺構	4-2区全景 (東から)
図版11	遺構	1 4-2区池 232 (南東から) 2 4-2区溝 164 (北から) 3 4-2区溝 35 (南から)

- 4 4-2区溝 39 (南から)
- 図版 12 遺構 1 4-2区西半部 (東から)  
 2 4-2区柵 303 ピット 107・109・114 (南から)  
 3 4-2区柵 303 ピット 150・115 (南から)  
 4 4-2区柵 303 ピット 86・87 (南から)  
 4 4-2区土坑 200 (南から)
- 図版 13 遺構 1 4-1区全景 (東から)  
 2 4-1区掘立柱建物 304 (南東から)  
 3 4-1区竪穴住居 305 (南から)
- 図版 14 遺構 1 5-1区第1面西半部 (東から)  
 2 5-1区第1面土坑 1 (南から)  
 3 5-1区第1面土坑 4 (南西から)
- 図版 15 遺構 1 5-1区第2面中央部 (東から)  
 2 5-1区第2面全景 (東から)
- 図版 16 遺構 1 5-1区第2面溝 304 (北東から)  
 2 5-1区第2面溝 304 遺物出土状況 (北東から)  
 3 5-1区第2面溝 172・171 (北東から)
- 図版 17 遺構 1 5-2区全景 (西から)  
 2 5-3区全景 (西から)
- 図版 18 遺構 1 5-1区第3面竪穴住居 467 (東から)  
 2 5-2区竪穴住居 313 (東から)  
 3 5-2区竪穴住居 138 (東から)  
 4 5-3区竪穴住居 145 (北東から)
- 図版 19 遺物 5-1～5-3区出土土器
- 図版 20 遺物 5-1区溝 304 出土土器
- 図版 21 遺物 5-1区出土土器類
- 図版 22 遺物 5-1・5-2区出土石器・ガラス製品、4-1・4-2区出土土器
- 図版 23 遺物 4-2区出土軒瓦
- 図版 24 遺物 4-2・5-1区出土軒瓦
- 図版 25 遺物 4-2・5-1区出土平瓦
- 図版 26 遺物 4-2区出土丸瓦・平瓦

# 挿 図 目 次

図 1	5-1区調査前全景（西から）	1
図 2	4-2区作業風景（東から）	1
図 3	調査位置図（1：6,000）	2
図 4	調査区断面模式図	8
図 5	4-2区溝 283 実測図（1：80）	9
図 6	4-2区溝 164 実測図（1：80）	9
図 7	4-2区溝 251・35・39・167・146・土坑 200 実測図（1：80）	10
図 8	4-2区池 232 実測図（1：120）	11
図 9	4-2区柵 303 実測図（1：100）	11
図 10	4-2区池 232 景石・洲浜実測図（1：25）	12
図 11	5-1区竪穴住居 467 実測図（1：50）	13
図 12	5-1区溝 304 実測図（1：50）	14
図 13	5-1区溝 171・172・土坑 1・4・48（1：50）、溝 39（1：80） 実測図	15
図 14	5-2区竪穴住居 313・138 実測図（1：60）	17
図 15	5-2区竪穴住居 130（1：50）	18
図 16	5-2区掘立柱建物 473・土坑 98・99・ピット 442・溝 312・139 実測図（1：50）	19
図 17	5-3区竪穴住居 145・土坑 347・掘立柱建物 474・ピット 149・151～153 実測図（1：50）	20
図 18	4-1・4-2区出土土器実測図（1：4）	22
図 19	4-2区土坑 158 出土土器実測図（1：4）	23
図 20	4-2区池 232 出土土器実測図（1：4）	23
図 21	4-2区土坑 200・池 232 上層出土土器実測図（1：4、22のみ1：6）	24
図 22	5-1区竪穴住居 467 出土土器実測図（1：4）	25
図 23	5-1～5-3区出土土器実測図（1：4）	26
図 24	5-1区溝 304 出土土器実測図（1：4）	27
図 25	5-1区土坑 1 出土土器類実測図（1：4）	28
図 26	5-1区出土土器類実測図（1：4）	29
図 27	4-2区出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	30
図 28	5-1区出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	31
図 29	4-2・5-1区出土丸瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）	32
図 30	5-1・5-2区出土石器・ガラス製品実測図（1：1）	33

図 31 周辺調査位置図（1：1,500）	36
図 32 蛍光X線分析 試料No.1（120）	40
図 33 蛍光X線分析 試料No.2（121）	40
図 34 顕微鏡写真・X線写真 試料No.1（120-1～5）、試料No.2（121-1～5）	41

## 表 目 次

表 1 調査一覧表	4
表 2 遺構概要表	6
表 3 遺物概要表	22
表 4 出土土器観察表	42
表 5 出土瓦観察表	44

# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

## 1. 調査経過

本調査は、梅津太秦線限度額立体交差事業に伴う発掘調査である。調査は京都市から委託を受け、京都市文化市民局文化財保護課の指導の下、当研究所が実施した。2006年に南側の高架工事に伴う発掘調査を実施し、今回はその北側にあたる。2006年の調査では弥生時代中期・古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の溝、鎌倉時代の土坑、室町時代の火葬墓などを検出している。

調査対象地は、線路敷内の幅3m、総延長470mに及ぶ細長い調査区である。調査区は前回の3区に引き続き、城北街道より西側を4区、東側を5区とした。さらに東映太秦映画村北西の蜂岡踏切以西を4-1区、蜂岡踏切から映画村北東の城北街道踏切までを4-2区、城北街道踏切から特別養護老人ホーム東側の水路までを5-1区、水路から東側を2区に分けて5-2区・5-3区と細分した。4-1区は全長約19m、4-2区は全長約166m、5-1区は全長約138m、5-2区は全長約62m、5-3区は全長約38mを測る。機械掘削は線路敷内での素掘り掘削のため、法面を45度に保つという制約があったことから、掘削深度の深い部分は調査面が狭くなった箇所がある。4-2区東端部、5-1区東半部、5-2・5-3区では線路敷設時の盛土が厚いところと遺構面が深いところがあり、その箇所では調査面が極端に狭小となった。機械掘削は近世層を除去し、中世層上面で止め、その直下から人力による掘削を行った。4-2区西半では現代層直下が地山面となり、1面の調査であったが、4-1区・5-1～5-3区では2面の調査を行い、5-1区西端部では部分的に3面の調査を実施した。

4区は全域、5-1区では西から65mまでの範囲で、調査区南壁沿いに旧線路の石垣列を検出した。この石垣は旧線路の北端に相当し、花崗岩の間知石を1段から2段積み上げ、その内側にバラスを敷きレールを敷設したものである。現在のJR山陰線は当初京都鉄道として発足し、京都駅と嵯峨駅間は明治30年(1897)に、嵯峨駅と園部間が明治32年(1899)に開通している。ほぼ100年前のことである。南側の高架工事に先立って、今回の調査区側に線路を移設する工事



図1 5-1区調査前全景(西から)



図2 4-2区作業風景(東から)

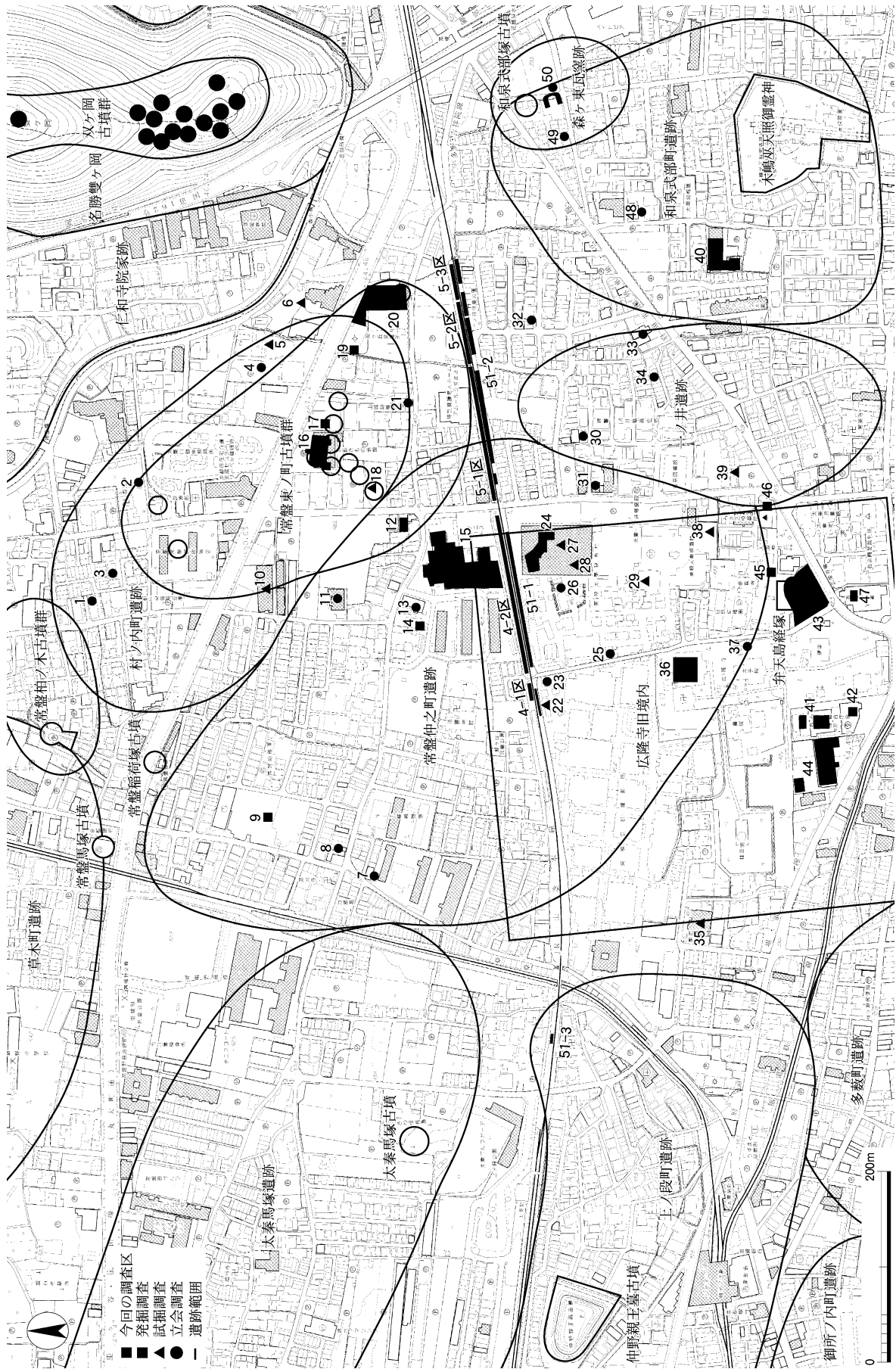


図3 調査位置図 (1 : 6,000)

が行われている。その際に調査区の表土をすき取り、碎石を盛り上げているため、遺構面の浅い4区では遺構面が削平されている箇所もみられる。

調査は中世以降を第1面、平安時代以前を第2面として実施し、写真撮影と実測を行った。5-1区西半では中世面が2面あり、計3面調査した。5-1区東半より東側は、中世の包含層（耕作土か）を除去すると、弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構を同一面で検出した。調査区が狭く長大であるため、遺物取り上げや図面作成には、国土座標を使用せず、調査区に沿って任意に割り付け実測を行った。図面完成後、原図に国土座標を付記した。平面図は1/20、遺物出土状況は1/10、断面図は1/20の縮尺で実測した。遺物の取上げは、調査区ごとに西から4mごとのメッシュを任意に設定し、番号を付し取上げを行った。

調査は京都市文化財保護課により、4月10・11・23日、5月19日、6月10日の5回指導を受けた。調査の進展に伴い4区で鎌倉時代の園池が検出されたため、5月31日に現地説明会を実施し、調査成果の公表に努めた。5区でも弥生時代中期と古墳時代後期の竪穴住居などを検出したが、調査区が深く見学場所が狭いことなど安全な見学が困難なため、現地公開を断念した。

## 2. 遺跡の位置と周辺の調査

調査地は京都盆地の北西部に位置し、北東に双ヶ岡が南北にのびており、その間に御室川、西に有栖川が北西から南東方向に流れている。さらに西へ行くと桂川が大きく蛇行しながら南流している。調査区の西半が低位洪積台地、東半は御室川の緩扇状地に属している。当該地は弥生時代の集落、古墳時代の集落、古墳群、古代寺院など遺跡が密集している重要な地域である。

弥生時代の集落としては、北に村ノ内町遺跡、南に和泉式部町遺跡がある。村ノ内町遺跡では弥生時代中期・古墳時代前期の土器が立会調査で確認されているのみであるが、和泉式部町遺跡では、1987年の調査（40）で弥生時代中期の竪穴住居が検出されている。また、古墳時代前期と中期の竪穴住居も検出されている。京都市内でも出土例の少ない韓式系土器も出土し、太秦一帯を支配していたとされる渡来系氏族秦氏との関連性が注目される。

常盤仲之町遺跡は古墳時代後期から飛鳥時代の集落跡で、1977年の発掘調査（15）により、竪穴住居24棟、掘立柱建物4棟が検出されている。また、この調査では鎌倉時代から江戸時代にかけての土壇墓が60基検出され、一帯が墓域であったことがわかっている。また、南側の東映太秦映画村の中でも調査（24）が実施され、飛鳥時代の竪穴住居4棟が検出されている。

一ノ井遺跡では発掘調査は行われていないが、立会調査によって奈良時代から平安時代の土坑・溝・柱穴などが確認されている。

太秦常盤の古墳は、低地の四条通から三条通の間に前方後円墳が分布し、大型円墳が新丸太町通より北に、時代が下がって群集墳は丘陵裾部から丘陵上に点在する。調査地周辺の古墳群は、双ヶ岡（双ヶ岡古墳群）に19基点在し、そのうち一ノ丘頂上の1号墳（一ノ丘古墳）は直径44m、高さが7.75mあり、横穴石室には一辺3mを越すチャートの巨石が用いられ、その規模は太秦の蛇塚石室に匹敵する。双ヶ岡西方の平地には、常盤東ノ町古墳群の円墳が点在する。1975年の調

表1 調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土壇・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
2	1988	広域立会	1988.05.26～ 1989.05.12	弥生の包含層、古墳後期の溝、平安の包含層、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
3	1993	立会	1993.10.06～ 1993.10.13	弥生の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
4	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
5	1988	試掘	1988.10.28	弥生の包含層、弥生土器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
6	1990	試掘	1991.03.12	平安の溝、弥生～平安の包含層	「試掘一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
7	1982	立会	1983.03.03	平安の柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
8	1986	立会	1986.06.03	室町の土壇5・包含層、土師器・瓦器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
9	2001	発掘	2001.05.07～ 2001.06.29	室町の土壇・溝	「常盤仲ノ町遺跡」『京都府遺跡調査概報』第102冊-1（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002年
10	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土壇・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
11	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土壇、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
12	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土壇2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
13	1986	立会	1986.11.04～ 1986.11.25	平安後期の東西溝	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
14	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土壇	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
15	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
16	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅰ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
17	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅰ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
18	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土壇2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
19	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土壇2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-Ⅰ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
20	1995	立会	1995.09.26～ 1995.10.07	平安の溝、古墳の溝、時期不明の土壇、溝、土師器・刀子・須恵器	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度 京都市文化観光局 1996年
21	1985	立会	1985.12.25～ 1986.01.06	路面	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
22	1984	試掘	1984.11.30	平安の土壇1・包含層、須恵器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
23	1989	立会	1989.09.04	平安中期の土壇、土師器・須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
24	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
25	1988	広域立会	88.05.26～ 89.05.12	古墳～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・瓦	『常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内』『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
26	1980	立会	1980.12.13	室町の土壇墓1、古墳後期の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年



No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
27	1981	試掘	1981.12.07	室町の土壇1、平安～室町の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
28	1982	試掘	1982.12.10	古墳後期～室町の土壇・柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
29	1981	試掘	1981.12.14～ 1981.12.17	鎌倉～室町の土壇6・柱穴18、土師器・須恵器・瓦器・瓦	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
30	1986	広域立会	1987.02.23～ 1988.03.30	平安～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・軒瓦	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
31	1988	立会	1989.01.24	鎌倉の包含層、土師器・白磁	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
32	1986	広域立会	1987.02.23	弥生～江戸の遺構・包含層、弥生土器・土師器・須恵器・軒瓦	「広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町・一ノ井遺跡・森ヶ東瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
33	1984	立会	1984.09.17	平安の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
34	1987	立会	1987.09.09	平安～室町の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年
35	1985	試掘	1985.07.24	古墳後期の包含層、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
36	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土壇、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
37	1982	立会	1982.09.10～ 1982.09.22	平安中期・後期の土壇、土師器・須恵器・瓦・瓦器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
38	1983	試掘	1983.12.14	平安前期・後期の土壇・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局 1984年
39	1988	試掘	1988.08.01	鎌倉の柱穴・土壇・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
40	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
41	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土壇・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
42	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
43	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
44	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土壇、平安時代の梵鐘製造遺構	「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊-2（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
45	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土壇、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
46	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	「広隆寺跡 - 右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要 -」昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
47	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土壇、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
48	1985	広域立会	1985.07.01～ 1986.03.15	古墳の竪穴住居・土壇・溝・柱穴、平安前期・中期の遺構多数、室町～江戸の遺構多数	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
49	1985	広域立会	1985.05.07～ 1985.11.30	古墳前期の竪穴住居・土壇・溝、平安中期の土壇・流路、室町～江戸の土壇・溝・他	「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
50	1986	立会	1986.11.17	ロストル式平窯1・灰原、軒平瓦4	「森ヶ東瓦窯跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
51	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳から飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土坑墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2006-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年

査（16）で円墳3基が検出され、東の隣接地（17）でも1基見つっている。このように太秦一帯は、弥生時代から飛鳥時代にかけて集落と古墳群が群集し、遺跡の宝庫といえる。

調査地南方に位置する広隆寺は、推古天皇11年（603年）秦河勝の創建とされ、蜂岡寺・秦公寺・葛野寺とも呼ばれる。1977年の調査（42）では飛鳥時代の建物基壇、奈良時代の土坑、平安時代の建物、1981年の調査（44）では平安時代の梵鐘鑄造遺構が見つっている。旧境内（45）では常盤仲之町遺跡と同様な古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居などが検出され、円筒埴輪も出土している。また、広隆寺境内で注目される調査としては、弁天島経塚（43）がある。平安時代後期の経塚で、直径12mの池の中島に16基が築かれていた。経塚の構造は、方形の小石室を造り経筒を外容器に入れて納めたもの、すり鉢形の石室に経筒を納め覆などで覆ったもの、石室を造らないものがある。経塚内からは経容器、経典類、和鏡・金属製品・ガラス玉・輸入青白磁・輸入銭貨など多量の副納品が出土している。

和泉式部町遺跡の北東に接して平安時代中期の森ヶ東瓦窯がある。1986年の立会調査（50）でロストル式平窯が検出されている。森ヶ東瓦窯は修理式所属の造瓦所に関連する窯跡と推定され、平安京跡や市内の寺院跡から森ヶ東瓦窯産の瓦が出土している。

中世には常盤地区で寺院の造営が行われている。調査地北東に臨済宗南禅寺派の普慶寺、北西に臨済宗天竜寺派の源光寺（源光庵）が建立されている。源光寺以前には源義経の母常盤御前ゆかりの浄土宗常盤院があったとされ、「源氏義経御母堂常盤御前御墓」と記した自然石がある。常盤仲之町遺跡からは鎌倉時代の瓦がまとまって出土した。建物跡は明確でないものの、当該地区に中世寺院あるいは仏堂が想定されている。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構		備 考
	4 区	5 区	
弥生時代		竪穴住居1棟	
飛鳥～奈良時代	竪穴住居3棟	竪穴住居4棟、掘立柱建物2棟、溝、落込、柱穴	
平安時代	土坑	溝	
鎌倉時代	掘立柱建物1棟、池、柵、土坑	柱穴、溝、土坑	
室町時代		溝、土坑、井戸	
江戸時代	土坑		

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

調査地の地表面の標高は、4-1区から5-1区までは45.20 m前後で、ほぼ平坦であるが、5-2区から5-3区にかけて低くなり、5-3区ではさらに下がり、44.10 mを測る。地山面の傾斜はさらに大きく下がる。

調査区が延長470 mに及ぶため、基本層序は調査区ごとに取り上げる。

4-1区と4-2区西半は、線路移設時のすき取り工事のため、表土・近世層・中世層は削平され遺存せず、現代盛土(碎石)の直下が地山層である。4-2区東半の池部分では、上から順に現代盛土層(碎石)0.3 m、近世層(黒褐色砂泥)0.3 m、中世層(池232堆積土・にぶい黄褐色砂泥)0.2 m、池の整地層(暗褐色砂泥)0.2 mとなる。池の堆積土は植物遺体や有機物を含まず、滞水した様子がみられないため、造られてまもなく埋められたか、水はけが良好で水がほとんど溜まらない池であったと想定される。

5-1区西端では、現代盛土(碎石)40 cm、近世層(黒褐色砂泥)0.05 m、中世層(暗褐色砂泥・灰黄褐色砂泥)0.2～0.4 mである。5-1区中央部も、4-1・4-2区同様に現代盛土層の直下が地山層となる。Y=-26,471付近より東が段差となり、盛土層(碎石)0.5 mの下に近世以降の耕作土層(黒褐色砂泥)0.15 m、中世層(灰黄褐色砂泥・耕作土層か)0.5 mと続く。Y=-26,428付近から東がさらに段差となり、中世層・近世層は削平されている。現代盛土0.4 m、近代盛土0.6 m、暗オリーブ褐色砂泥0.1 m、地山となる。5-2・5-3区では、現代盛土(碎石)0.5 m、旧線路敷盛土(碎石)0.3 m、近代盛土0.3 m、中世層(黒褐色砂泥・旧耕作土)0.1 mの下が地山層で、平安時代や古墳時代の遺構が検出される。中世層が削平され、近代盛土の直下が地山層となる箇所もみられる。

#### (2) 4区の遺構

4-1区は、東西約19.1 m、南北約3.3～3.4 mで、竪穴住居・掘立柱建物・柱穴・土坑・炉跡などを検出した。主なものには飛鳥時代の竪穴住居305と炉262、掘立柱建物304などがある。

4-2区は、東西約166.7 m、南北約3.1～3.7 mで、中世の池跡・溝・柱跡・土坑などを検出した。主なものには、飛鳥時代の竪穴住居277・141・溝283、鎌倉時代の池232・溝35・39・146・167・251、江戸時代の土坑200などがある。

##### 4-1区の遺構(図版1・13)

竪穴住居305(図版1、13-3) Y=-26,730地点の地表下0.3 m、標高44.7 mで検出した。大部分が削平されているため輪郭がはっきりしないが、住居に付属するとみられる炉262や土坑279、床面の一部を検出した。遺構面から飛鳥時代の遺物が出土している。

掘立柱建物304(図版1、13-2) 東西1間以上×南北2間以上の掘立柱建物で、Y=-26,745地点で検出した柱穴1・2・5・119から復元した。柱穴の径は約0.3 m、深さ約0.2 m、柱穴1

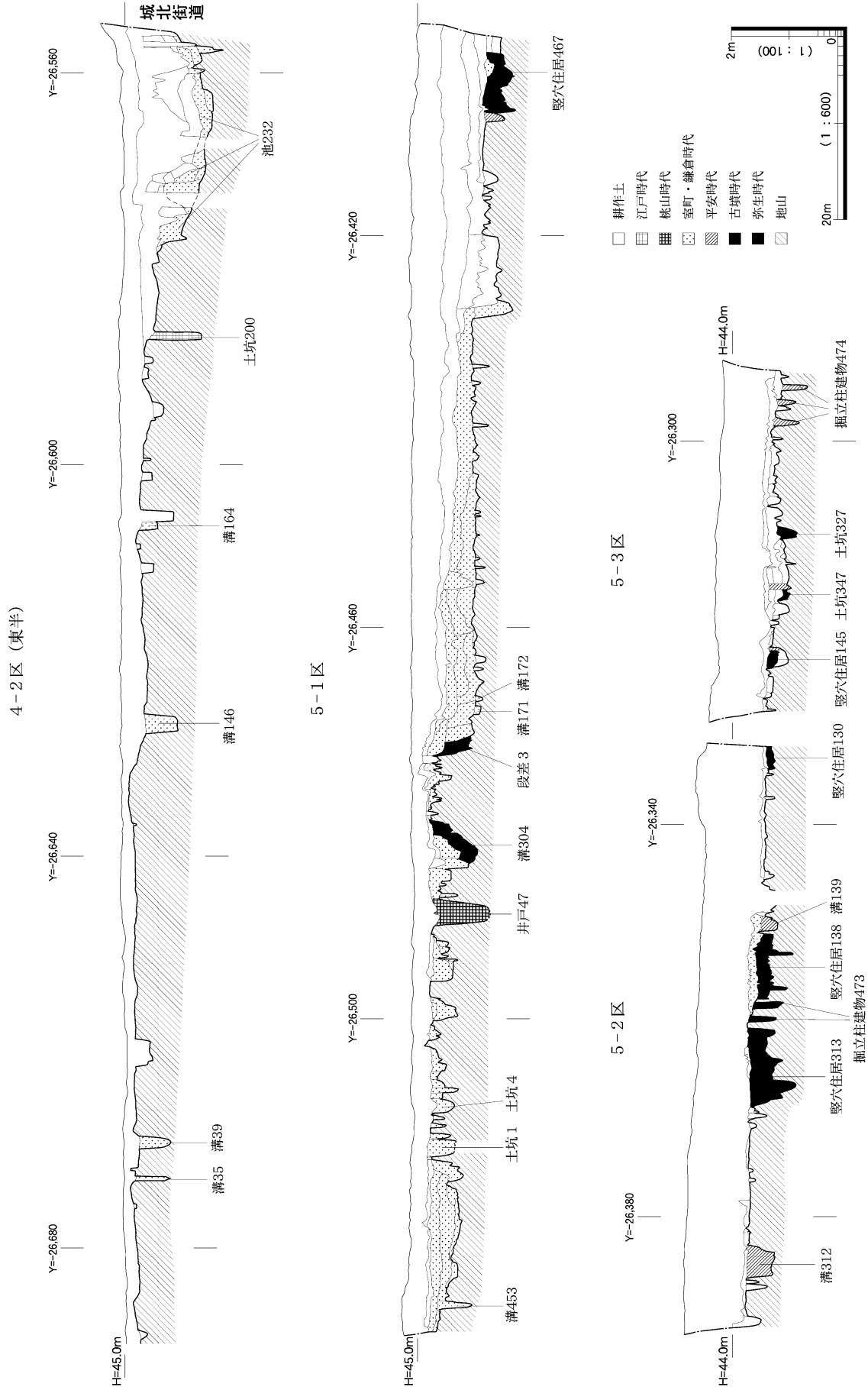


图4 調査区断面模式图

には根石がある。柱穴 119 と柱穴 1、柱穴 1 と柱穴 5 の間隔は約 1.8 m である。建物の南北軸線は北で 11 度 25 分東に傾いている。中世に属すると考えている。

#### 4-2 区の遺構（図版 1～3・10～12、図 5～10）

竪穴住居 277・141（図版 2）ともに  $Y=-26,630$  の東側で検出した。上部は削平され、ほとんど残っていなかった。竪穴住居 277 は壁溝のみ残存しており、東西約 3 m、南北 0.2 m 分を検出した。2006 年度調査の竪穴住居 409 の北壁溝部分と考える。竪穴住居 141 は東西約 1 m、南北 0.8 m 分を検出した。2006 年度調査の竪穴住居 382 の北端と考える。

溝 283（図 5） $Y=-26,573 \sim 576$  で池 232 の肩口で検出した幅約 1.0 m、長さ 3.8 m 以上、深さ 0.5 m の溝状遺構である。地山の砂礫層上面で検出し、底面は北東方向に低くなる。遺物は小片で、時期は不明であるが、池 232 が造られる前のものである。

土坑 158（図版 3） $Y=-26,609$  地点で幅約 2 m、南北約 3 m 分を検出した溝状の遺構である。北側は浅く、南半で深さ約 0.2 m を測り、南半から平安時代（11 世紀中頃）の遺物がまとまって出土した。2006 年調査の溝 294 が南延長線上で検出されているが、鎌倉時代の遺物が出土しているもので、同一の溝ではなく、別遺構の可能性はある。

池 232（図版 11-1、図 8・10） $Y=-26,557 \sim 577$  で検出した。 $Y=-26,577$  地点から東方に低くなる谷筋の、にぶい黄褐色砂泥や褐色砂礫の地山に盛土・整地し形造られている。池の汀には、拳大の礫や瓦を敷き汀 244 と汀 245 を造っている。汀の方向からは調査区外の 1～2 m ほどで北岸になると予想される。汀 245 の内側には長辺 1.3 m、短辺 0.34 m、高さ 0.5 m の景石を、汀と平行に配置している。池の底面は、地山層の上に暗褐色砂泥や褐色砂泥を整地して水が抜けないように工夫している。汀の上面は標高 44.2 m、池底は標高 43.7 m である。汀の標高からみて池の水位は標高 44.0 m、水深は 0.3 m 程度と考えられる。景石上面の標高は 44.3 m なので、景石は約半分水面に顔を出した状態と考えられる。西汀線から鎌倉時代の遺物が出土した。

溝 251（図 7） $Y=-26,704$  地点で幅 1.0～1.3 m、深さ約 0.5 m、南北 3 m 分を検出したほぼ

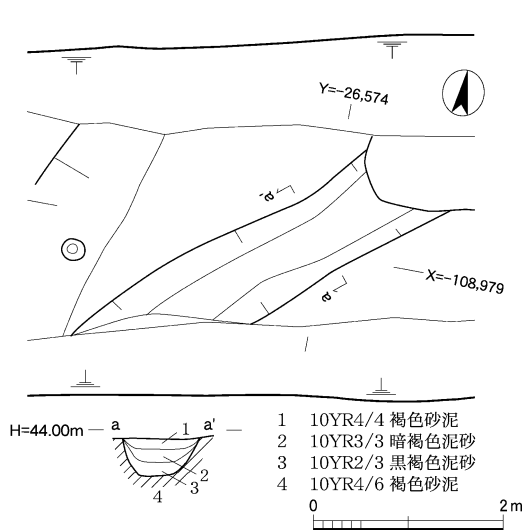


図 5 4-2 区溝 283 実測図（1：80）

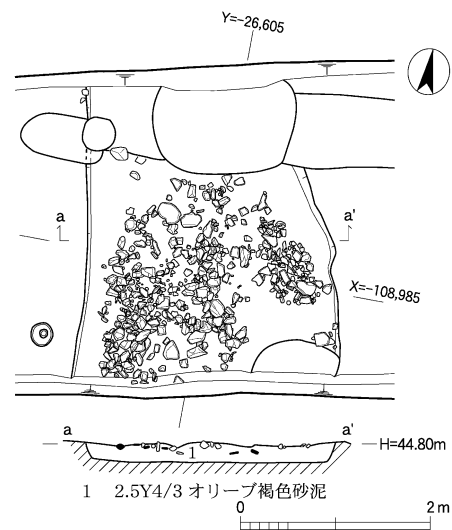


図 6 4-2 区溝 164 実測図（1：80）

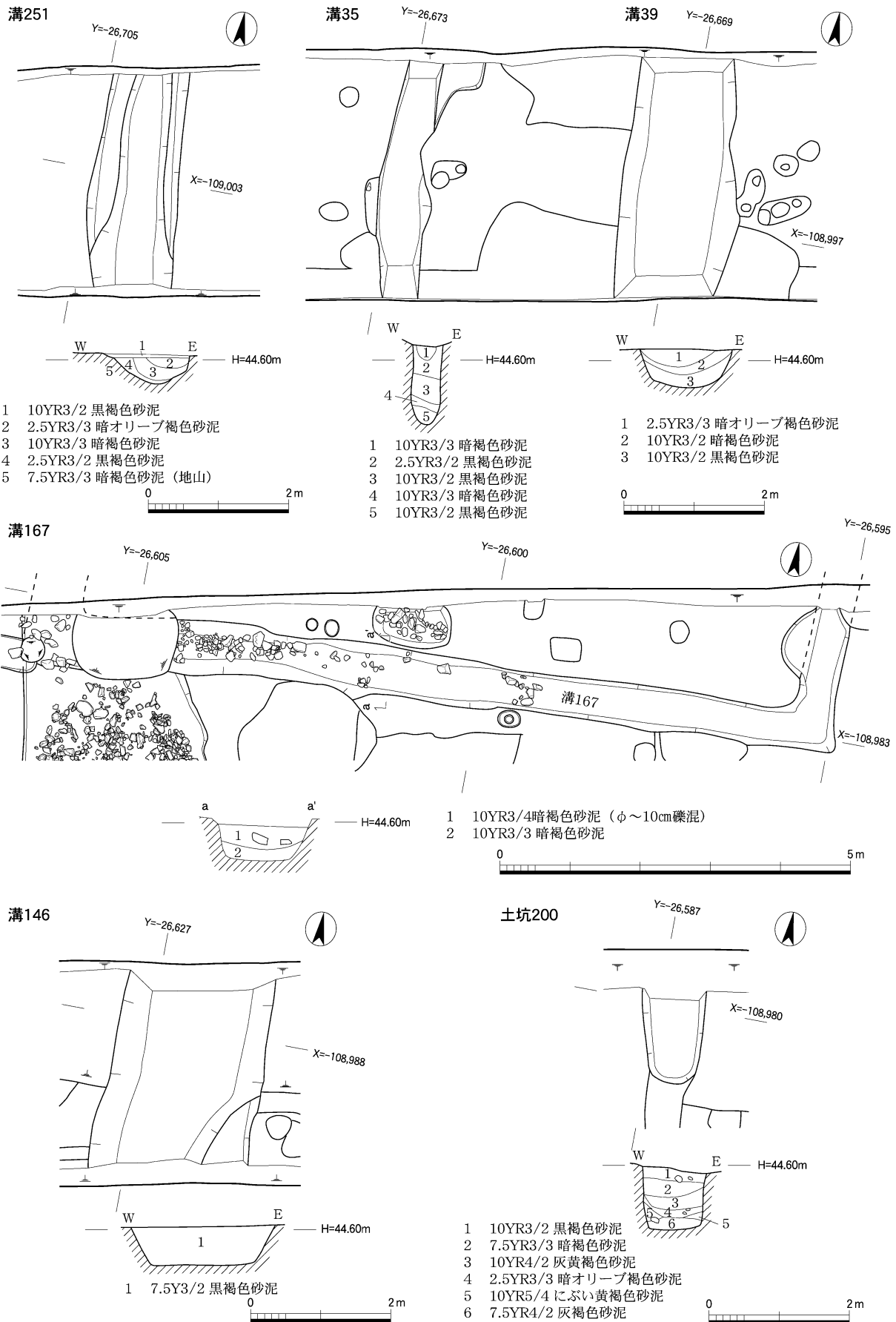


図7 4-2区溝 251・35・39・167・146・土坑 200 実測図 (1:80)

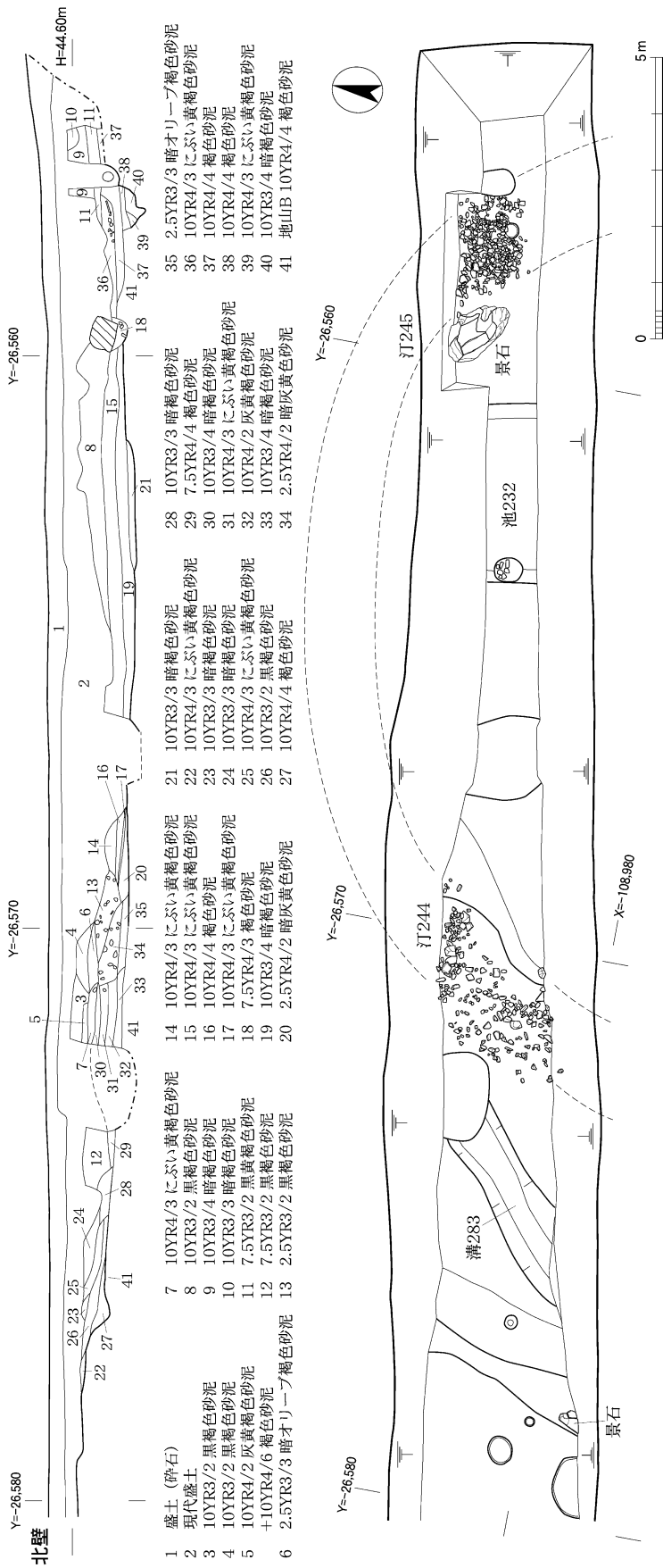


図8 4-2区池232実測図 (1:120)

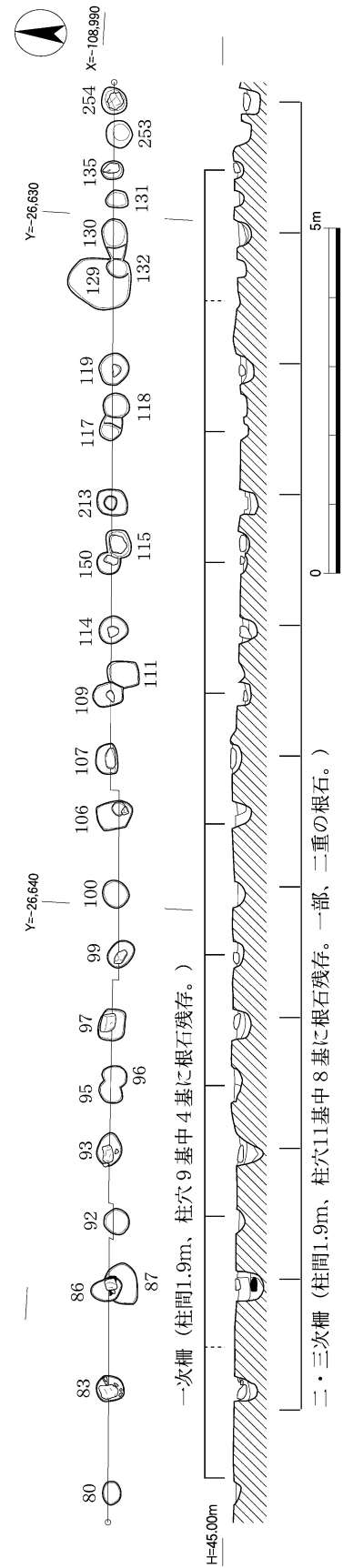


図9 4-2区柵303実測図 (1:100)

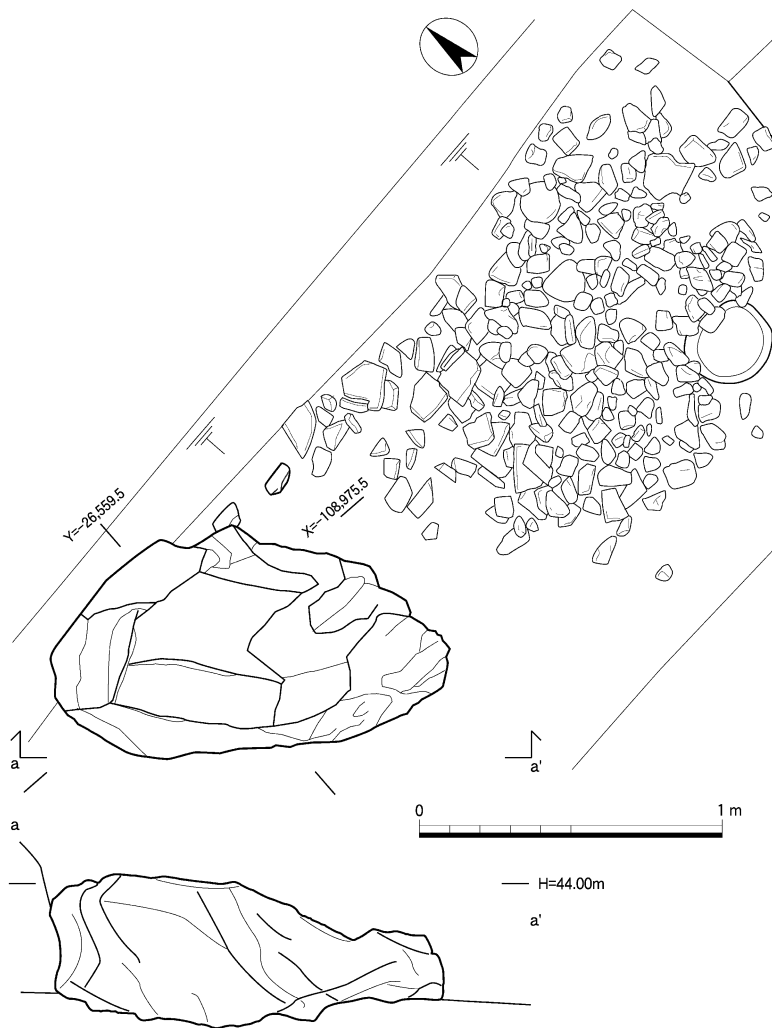


図10 4-2区池232景石・洲浜実測図(1:25)

柱穴列である。そのうちの12基には根石が据付けられている。根石の残存の多少と重複部分から、一次柵(ピット80・92・95・99・106・109・150・117・135)、二次・三次柵(ピット86・93・97・100・107・114・213・119・130・254)と考えた。柱間約1.9mで10間分を復元した。東西軸線は東で約3度11分北に傾く。下記の溝146の西端まで続き、ほぼ直行していることから、同時期のものと考えられる。

溝146(図7) Y=-26,627地点で幅2.2m、深さ0.6m、南北2.9m分を検出したほぼ南北方向の溝である。溝埋土からは鎌倉時代の遺物が出土している。2006年調査で同様な遺構が南延長線上で検出されている。

溝164(図版11-2、図6) Y=-26,605地点で幅2.6m、深さ約0.2m、南北3.0m分を検出した溝状遺構である。埋土には、多量の握り拳大の礫と瓦が混入しており、瓦は平安時代から鎌倉時代のものである。2006年調査では同様の溝187が南延長線上で検出されている。

溝167(図7) Y=-26,595～606地点で検出した幅0.6～0.8m、深さ0.3m、東西約11.5mの溝状の遺構である。東端で直角に曲がり、2m北へ延び敷地外へ続く。埋土には拳大の礫や瓦が多く含まれる部分もある。西端は攪乱で切られ確認できなかった。溝の底面はほぼ水平で、布

南北方向の溝である。礫層の地山層を掘り下げて成立している。2006年調査で同様な遺構が南延長線上で検出されている。

溝35・39(図版11-3・11-4、図7) Y=-26,670付近で検出した。溝35は幅0.5～0.8m、深さ1.1m、南北3.4m分を検出したほぼ南北方向の溝である。溝39は幅1.4～1.6m、深さ約0.6m、南北3.4m分を検出したほぼ南北方向の溝である。ともに北側が0.1m深くなる。2条の溝は約2.8m間隔でほぼ平行する。2006年調査で同様な遺構が南延長線上で検出されている。

柵303(図版12-1～12-4、図9) Y=-26,628～650地点でほぼ直線的に並ぶ26基の



掘基礎の可能性もある。しかし根石は検出できなかった。

土坑 200 (図版 12- 5、図 7) Y=-26,587 地点で検出したもので、幅 0.9 m、南北 1.4 m 以上、深さ 1.0 m を測る。土坑は敷地外の北に続く。埋土は礫と粘土の互層堆積の部分もある。江戸時代 (17 世紀後半) の遺物がまとまって出土した。

### (3) 5 区の遺構

5- 1 区は、中央部に段差があり西半が一段高く、東半が低くなる。西半の段差上と東半の段差下では、遺構の様相が異なる。段差上では室町時代から鎌倉時代のピット・土坑・溝、飛鳥時代の溝などが検出され、段差下の東端では弥生時代の竪穴住居 1 棟、中世の溝やピット・土坑などを少数検出した。また、調査区西端部では鎌倉時代から室町時代のピットを検出した。ピットには底部に根石を据え付けたものもあり、建物の柱穴と認定できるものの、面積が狭いため建物の詳細は不明。

5- 2 区は、5- 1 区の東端から緩やかに東へ低くなる平坦面が続き、この平坦面で飛鳥時代の竪穴住居 3 棟・掘立柱建物 1 棟・土坑、平安時代の溝 2 条を検出した。

5- 3 区は、5- 2 区から続く平坦面で飛鳥時代の竪穴住居 1 棟・掘立柱建物 1 棟・土坑 1 基・ピット

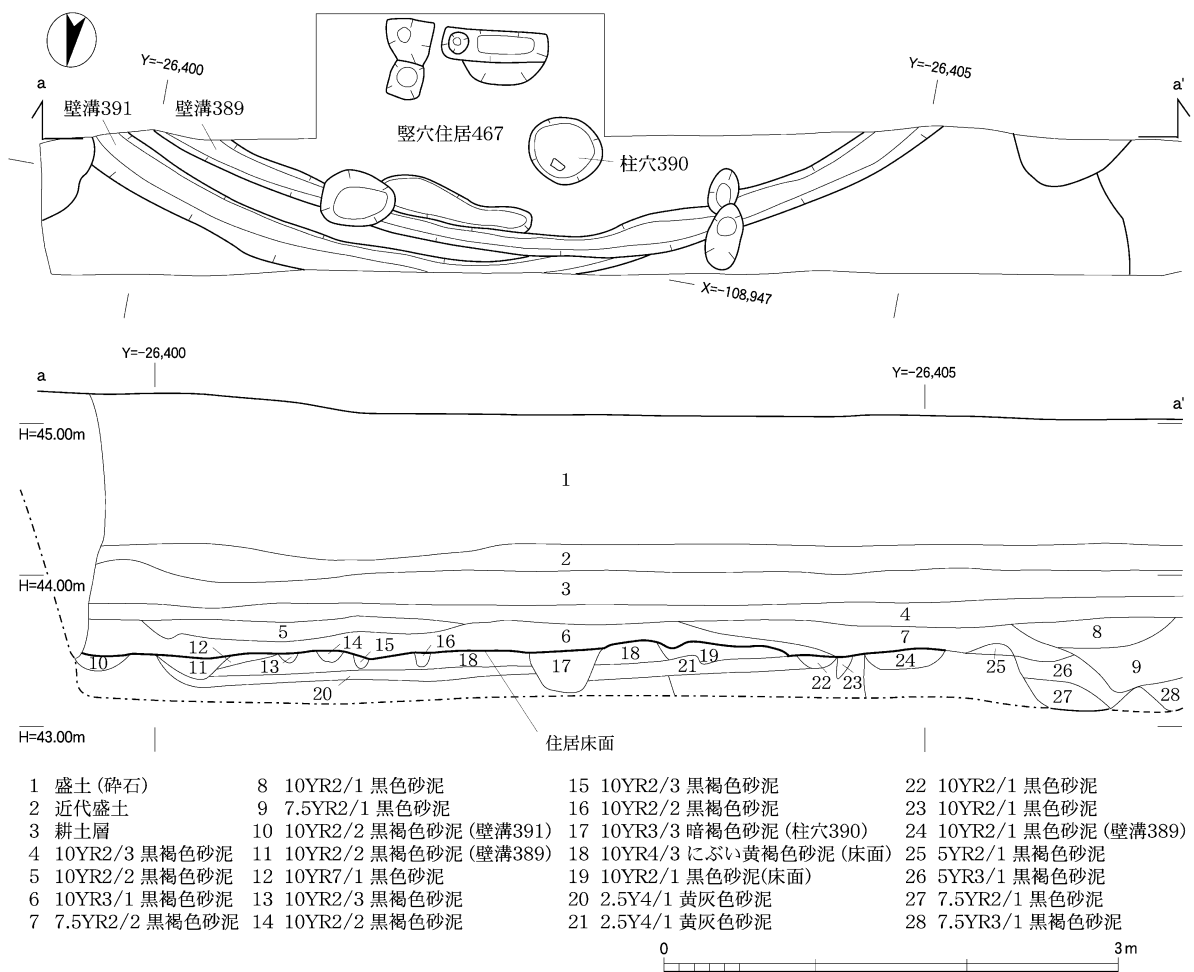


図 11 5- 1 区竪穴住居 467 実測図 (1 : 50)

トを検出した。

### 5-1区の遺構（図版4～7・14～16・18、図11～13）

竪穴住居 467（図版 18- 1、図 11） 5- 1 区東端で検出した円形竪穴住居である。幅 1 m の調査区内であるため、わずかな円弧の検出であるが、直径は 8 m 前後に復元できる。住居の深さは

東側で 0.2 m あり、西半は古墳時代に削平されている。壁溝は二重に巡るところがあり、建替えが行われた可能性がある。また、床面をはがしたところ、小ピットを多数検出できた。壁を保護する杭の可能性ある。柱穴と思われるピット 390 から弥生時代中期（IV 様式）の無頸壺が 1 点出土している。

溝 304（図版 16- 1・16- 2、図 12） 調査区を北東から南西へ斜めに横断している溝状遺構で、幅約 2.8 m、深さ 0.7 m を測る。西肩を中世の土坑に壊されている。埋土は上層が黒褐色砂泥層、下層がにぶい黄褐色から暗褐色の砂泥層で水が流れた様子はみられない。下層から飛鳥時代の土師器杯・高杯・甕・甌、須恵器杯・甕が一括で出土している。

段差 3（図版 5） Y = -26,472 付近より東側で 0.7 m ほどの段差がある。段差の肩部から東へ 1.5 m までは飛鳥時代の層が残っているが、それより東は鎌倉時代の包含層となり、この時期に削平されたと想定される。溝 304 と連結する可能性がある。段差 3 の 1 層（鎌倉時代）からガラス玉が 1 点出土している。

溝 171・172（図版 16- 3、図 13） 段差 3 の東側で 2 条並んで検出した。溝 171 は幅 1.0 m、溝 172 が 0.5 m、深さはどちらも 0.15 m を測る。溝 172 は 2～8 cm ほどの小石を敷き詰めている。溝 171 にも数は少ないが同じ大きさの小石が認められ、172 同様に敷き詰められていたと思われる。溝の方向はどちらも北に対してやや東へ振っている。わずかながら鎌倉時代の土師器皿が出土している。

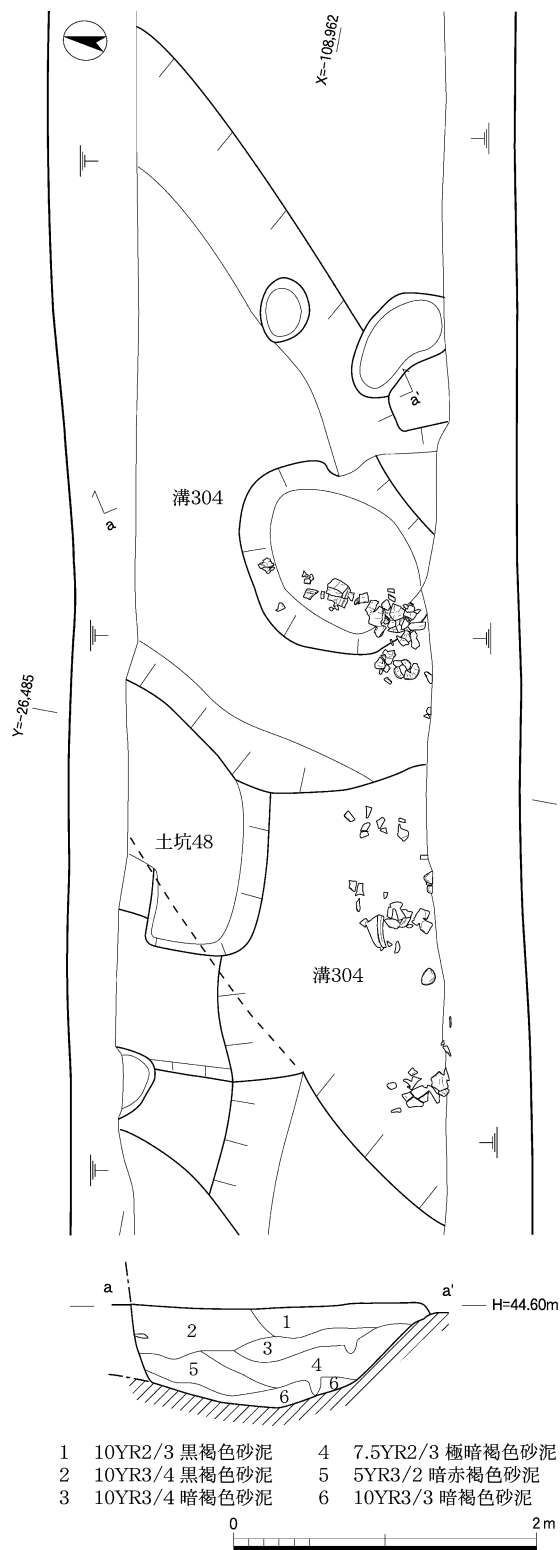


図 12 5-1区溝 304 実測図（1：50）

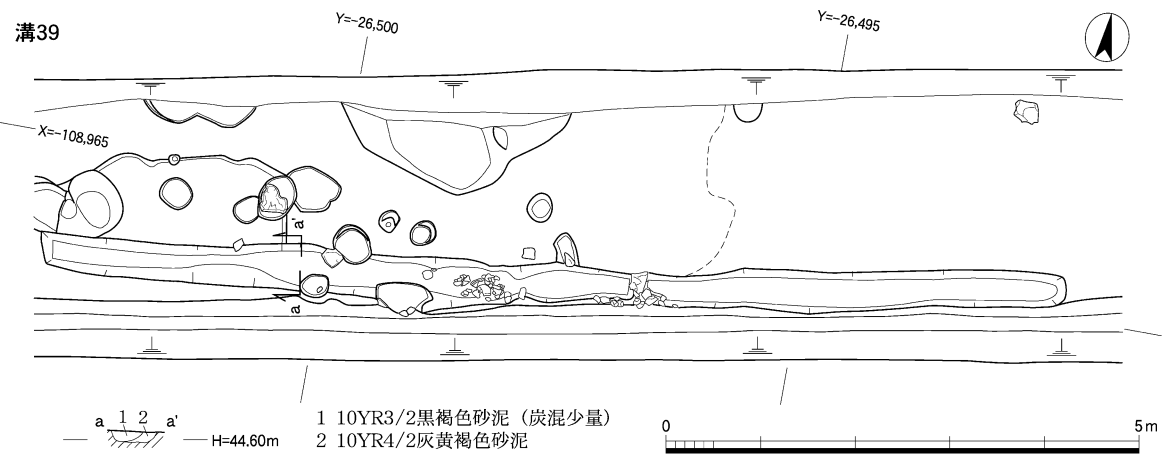
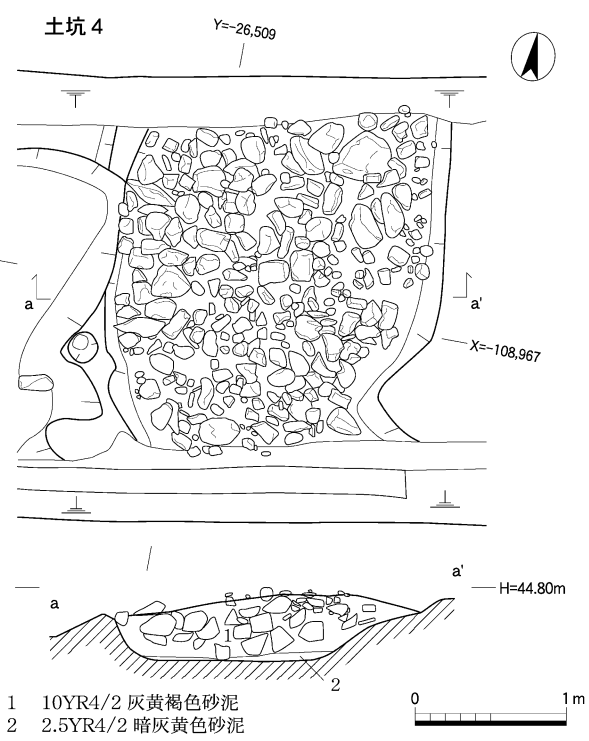
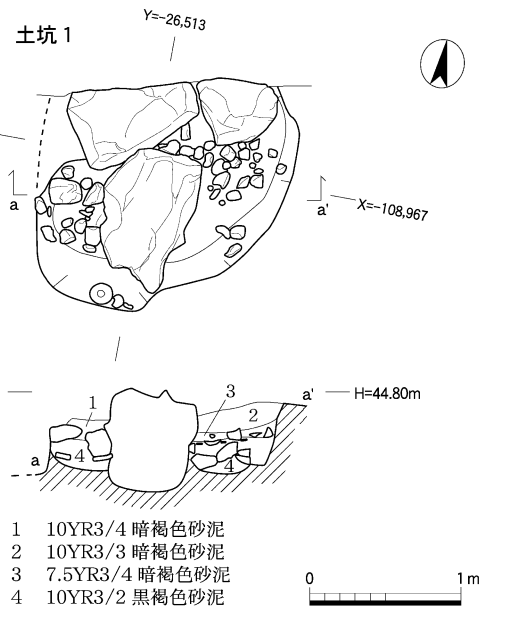
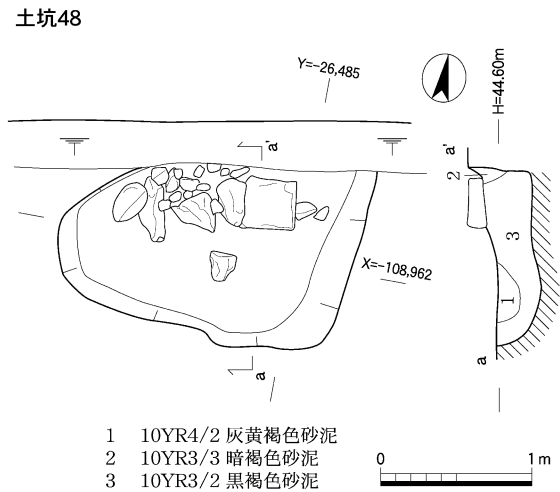
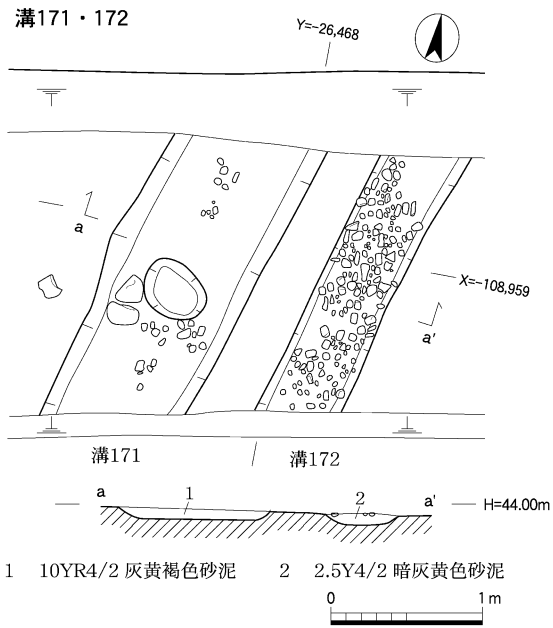


图13 5-1区溝171・172・土坑1・4・48 (1:50)、溝39 (1:80) 实测图

溝 453 (図版 4) 調査区の西端 Y=-26,530 付近で南北方向に検出した。幅 1.0 m、深さ 0.6 m で断面形は U 字形である。溝の方向は真北を向く。現在の城北街道に沿って延長しており、旧城北街道の側溝の可能性もある。遺物はほとんど出土していないが、層序の関係から鎌倉時代と思われる。

土坑 1 (図版 14- 2、図 13) 西半部ピット群の東側で検出した。北側は調査区外にはみ出しているが、東西 1.7 m、南北 1.5 m 以上、深さ 0.5 m である。中に長辺 0.9 m、短辺 0.6 m ほどの大きな石が 3 個埋まっている。いずれもチャートで同一個体を 3 つに割ったように見受けられる。石の周囲から拳大の石と鎌倉時代の土師器皿などの土器や炭が出土した。土坑 1 の形状は土坑 4・34 とともに土取穴に類似している。

土坑 4 (図版 14- 3、図 13) 土坑の北と南が調査区外にはみ出し、東西 1.2 m、南北 1.2 m 以上、深さ 0.4 m を測る。埋土は大部分を多量の石で埋められている。石は径が 5～30 cm 程度の大きさがあり、中世の瓦も含まれる。石はチャートや砂岩など近隣で採取できる石ばかりである。

土坑 34 (図版 4) 土坑 4 の西側に接しており、東西 1.3 m、南北 2.1 m 以上、深さ 0.2 m を測る。埋土から中世の土器とともに石鏃が 1 点出土している。

土坑 48 (図 13) 遺構の南半を検出し、全体の大きさは不明であるが、東西 1.9 m、南北 1.2 m 以上あり、径 30 cm ほどの石を東西に 5 個並べている。石材は凝灰岩、花崗岩・チャートが用いられ、骨や副葬品の出土は見られないが、中世の土壙墓の可能性もある。

ピット群 (図版 4) 土坑 1 より西側で検出したピット群で、底部に根石を設置したピットもあり、その一部は建物の柱穴と思われる。小面積のため建物の様相はつかめないが、城北街道に沿って建てられた中世の建物群と想定できる。

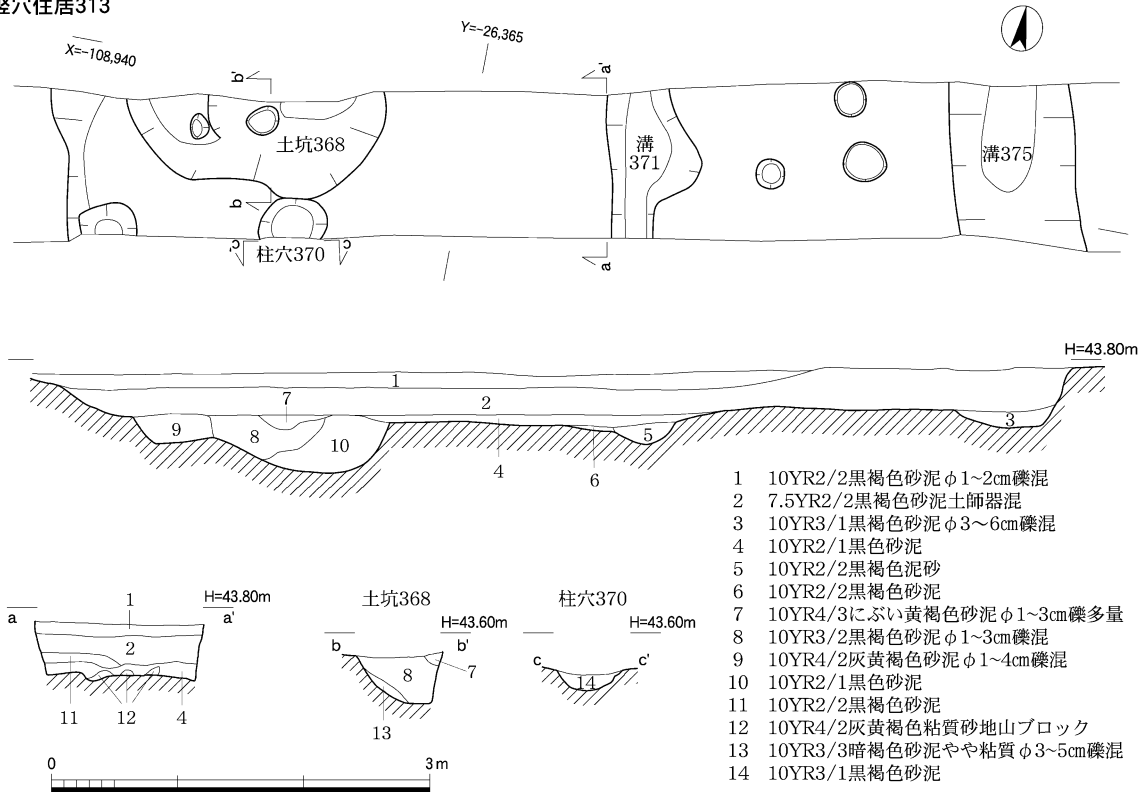
溝 39 (図 13) Y=-26,492～503 で東西方向に検出した溝である。幅 0.4 m、深さ 0.2 m で長さ 11 m にわたって検出した。埋土から室町時代の土器が出土している。

井戸 47 (図版 5) 調査区の北壁外に 2/3 程度はみ出した素掘りの遺構で、底部まで調査できていないが円形の井戸と思われる。直径 2.9 m、深さ 1.4 m 以上を測り、埋土は多量の石で埋められている。井戸枠は遺存していないが、石組みの石を抜き取って埋められた可能性がある。桃山時代の施釉陶器が 1 点出土した。

#### 5- 2 区の遺構 (図版 8・17・18、図 14～16)

竪穴住居 313 (図版 18- 2、図 14) 調査区中央部西寄りで検出した。東西 8.0 m、南北 1.5 m 以上、深さ 0.3～0.4 m である。平面形は遺構の一部のみで全体形は不明であるが、西辺・東辺が直線で調査区外へ延びていることから方形の竪穴住居と思われる。断面形は東肩からほぼ直に下がり、落ちた部分に幅 0.7 m、深さ約 0.1 m の南北方向の溝状の窪み溝 375 がある。溝 375 から西へ平坦面が続き、東肩から 3.2 m 地点で一段下がる。落ちた部分に幅 0.5 m、深さ 0.13 m の南北方向の溝 371 がある。さらに西側へ平坦面が続き、西肩部は斜めに立ち上がる。住居内の北壁沿いに西 2.0 m、南北 0.75 m 以上、深さ 0.5 m の土坑 368、西肩の南壁きわに柱穴 370 を検出した。住居は溝 371 より西側約 4.8 m 幅が 1 棟で、溝 375 から西側が、規模は不明ではあるが別の 1 棟

竪穴住居313



竪穴住居138

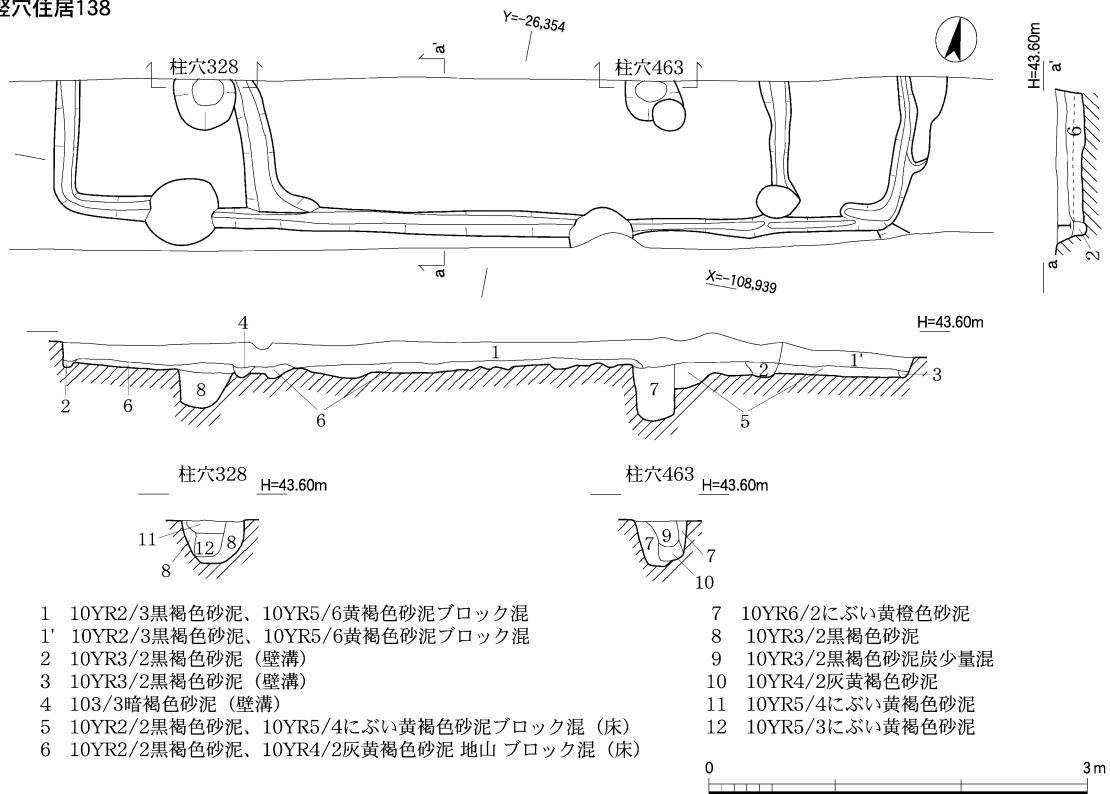


図14 5-2区竪穴住居313・138実測図（1：60）

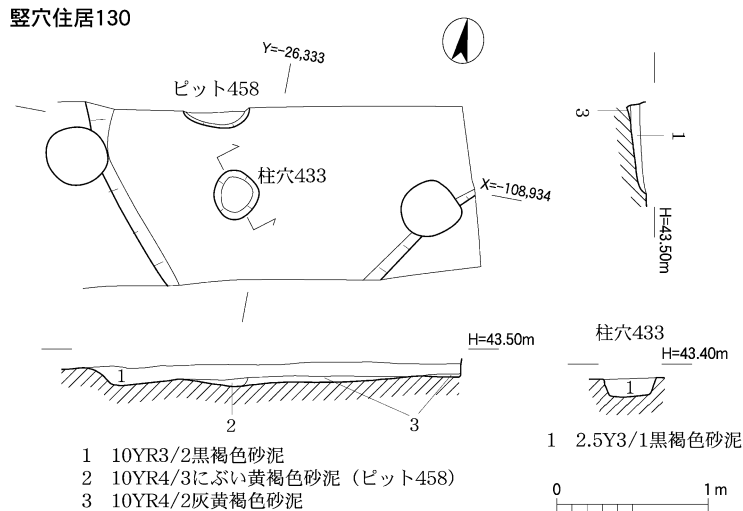


図 15 5-2区竪穴住居 130 実測図 (1 : 50)

分の約 1 / 4 に当たり、2 棟が重複する。東西 6.75 m、南北 1.2 m 以上、深さ 0.4 m である。覆土は 0.1 ~ 0.2 m、貼り床は 0.04 ~ 0.2 m の厚さである。西側住居の壁溝は検出範囲内に巡っており、幅は 0.15 ~ 0.2 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m である。東側住居は南辺東で一部とぎれるが、ほぼ巡っている。幅は 0.15 ~ 0.25 m、深さ 0.05 m 程で、南辺部は一部重複している。支柱穴は柱穴 328・463 で北壁沿いに検出した。柱間は 3.6 m、直径約 0.3 m、深さ 0.35 ~ 0.4 m で柱痕跡は直径 0.2 m である。この柱穴は位置関係から西側の住居に伴うものと思われる。新旧関係は断面切合いから東側が先で、西側が後から造り替えられたと思われる。住居は西へ 8 度振れる。埋土から飛鳥時代の須恵器、土師器が出土した。

竪穴住居 130 (図 15) 調査区東端で検出した。検出したのは住居の西辺 1.5 m、南辺 0.9 m の南西部で、南西隅は調査区外にある。深さ 0.15 m、覆土が 0.05 ~ 0.15 m、貼り床の厚さ 0.03 ~ 0.05 m 程である。壁溝は検出できなかった。柱穴は柱穴 433 の 1 基で、直径 0.3 m、深さ 0.1 m である。住居の辺が直線であるから、方形の竪穴住居とみられるが、全体形は不明である。埋土から飛鳥時代の須恵器、土師器が出土した。

掘立柱建物 473 (図 16) 調査区中央の竪穴住居 138 の西側と竪穴住居 138 下層で検出した。検出した柱穴は 3 基 (110・311・451) である。長軸 0.6 ~ 0.8 m、短軸 0.4 ~ 0.6 m 以上、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。110・311 は北壁に延びる。いずれの柱穴も約 0.2 m の柱痕跡が認められた。柱間は東西にほぼ 1.4 m 等間の 2 間、南側では関連する柱穴は検出されていないことから、北側へ延びる掘立柱建物と思われる。建物は西へ 5 度振れる。埋土から飛鳥時代の土師器、須恵器が出土した。

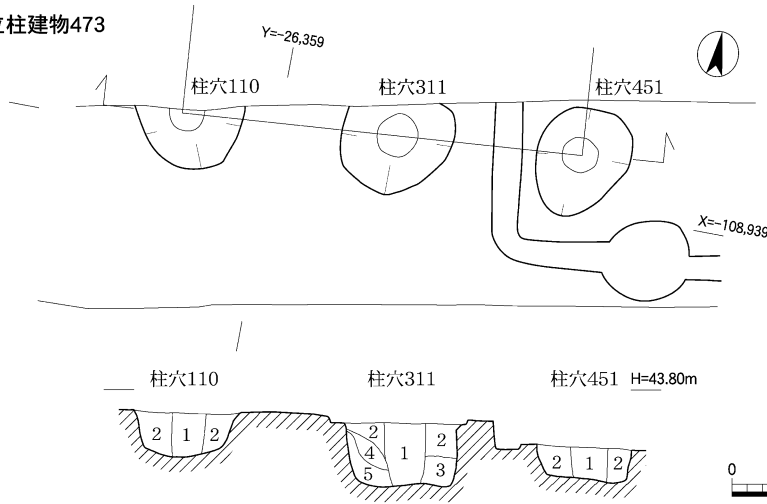
土坑 333 (図版 8) 調査区西側の南壁沿いで検出した。東西 0.7 m、南北 0.35 m 以上、深さ 0.3 m である。平面形は楕円形である。埋土から飛鳥時代の須恵器が出土した。

土坑 98 (図 16) 調査区西寄りの南壁沿いで検出した。検出したのは北端部の一部で、大部分は南側に延びる。東西 2.65 m、南北 0.25 ~ 0.3 m 以上、深さ 0.35 ~ 0.4 m、断面形は西側半分

と考えられる。貼り床と思われる層は一部見られたが、住居の切り合い関係を示すものは検出できなかった。しかし、住居 2 棟が重複していることは明らかである。住居は西へ 9 度振れる。埋土から古墳時代と飛鳥時代の須恵器、土師器、土坑 368 からガラス製品が 1 点出土した。

竪穴住居 138 (図版 18-3、図 14) 調査区中央部で検出した。検出したのは住居の南辺部

掘立柱建物473



柱穴110

- 1 10YR2/1黒色砂泥
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥

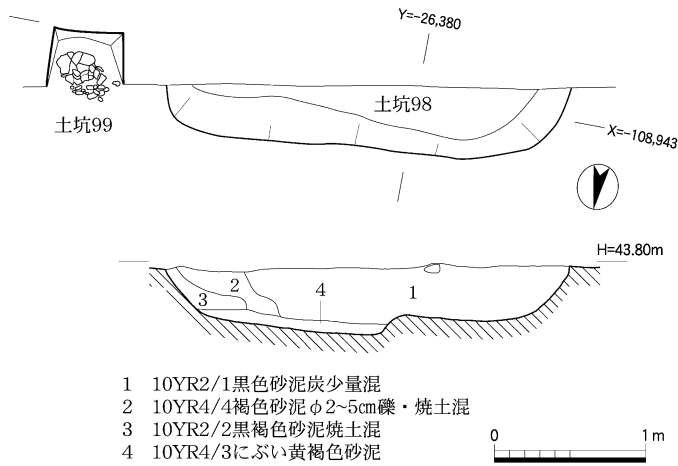
柱穴311

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥
- 3 2.5YR3/1黒褐色砂泥  
2.5YR5/3にぶい赤褐色砂泥混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥  
10YR2/1黒色砂泥混
- 5 2.5Y2/1黒褐色砂泥

柱穴451

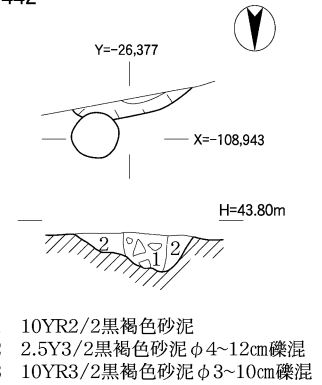
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥

土坑98・99



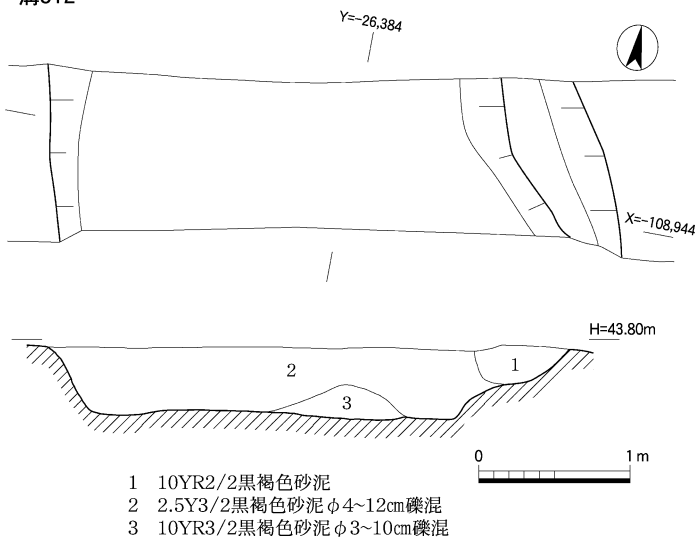
- 1 10YR2/1黒色砂泥炭少量混
- 2 10YR4/4褐色砂泥φ2~5cm礫・焼土混
- 3 10YR2/2黒褐色砂泥焼土混
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

ピット442



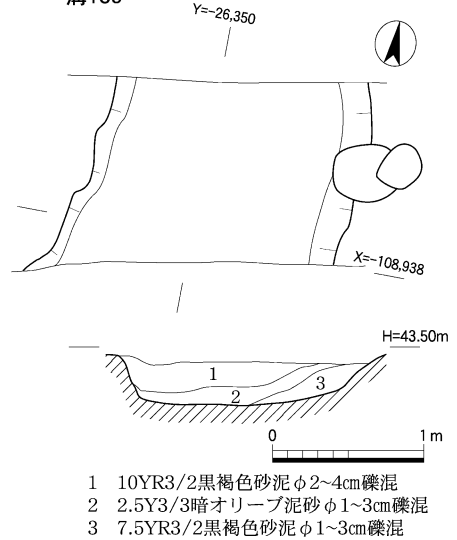
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥
- 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥φ4~12cm礫混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥φ3~10cm礫混

溝312



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥
- 2 2.5Y3/2黒褐色砂泥φ4~12cm礫混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥φ3~10cm礫混

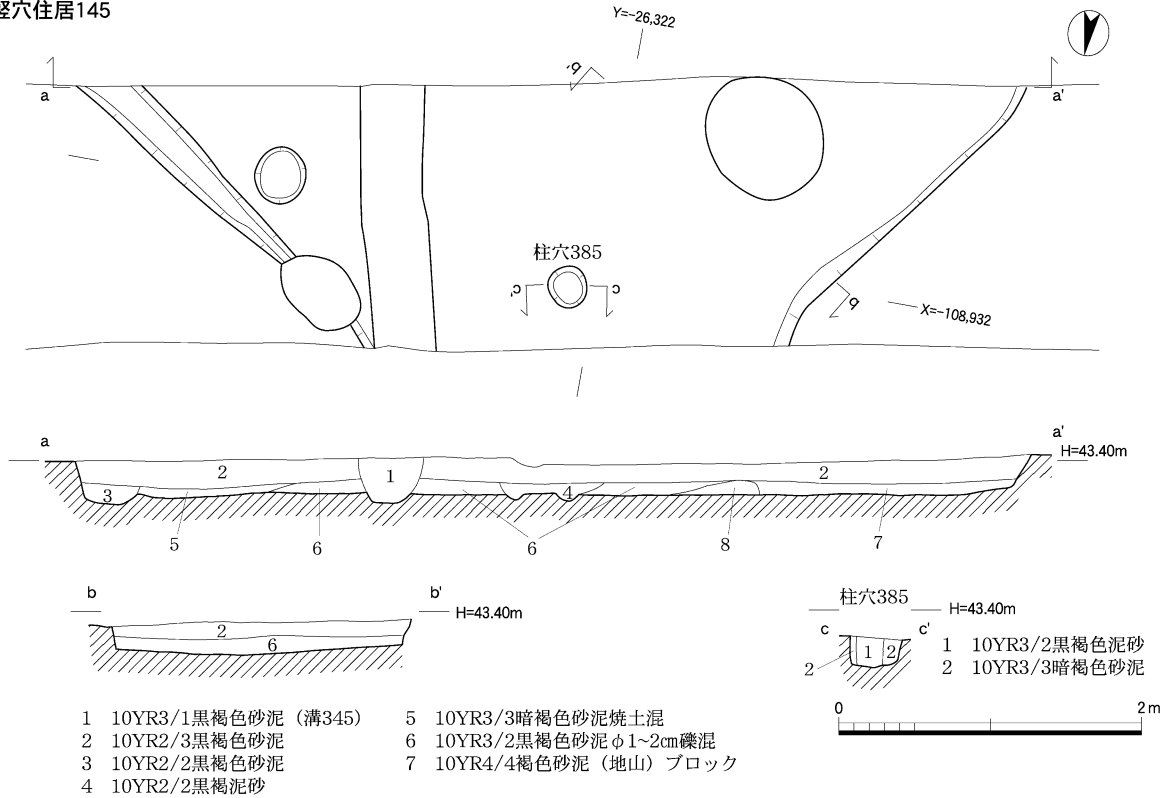
溝139



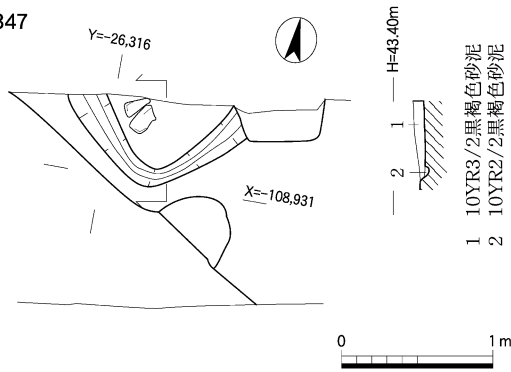
- 1 10YR3/2黒褐色砂泥φ2~4cm礫混
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ泥砂φ1~3cm礫混
- 3 7.5YR3/2黒褐色砂泥φ1~3cm礫混

図 16 5-2区掘立柱建物 473・土坑 98・99・ピット 442・溝 312・139 実測図 (1 : 50)

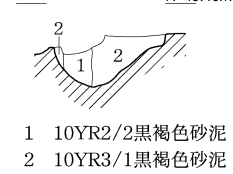
竪穴住居145



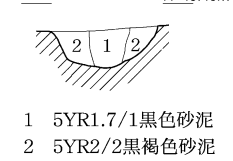
土坑347



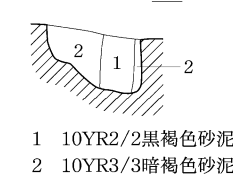
ピット149



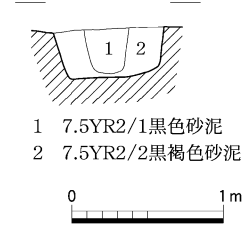
ピット151



ピット152



ピット153



掘立柱建物474

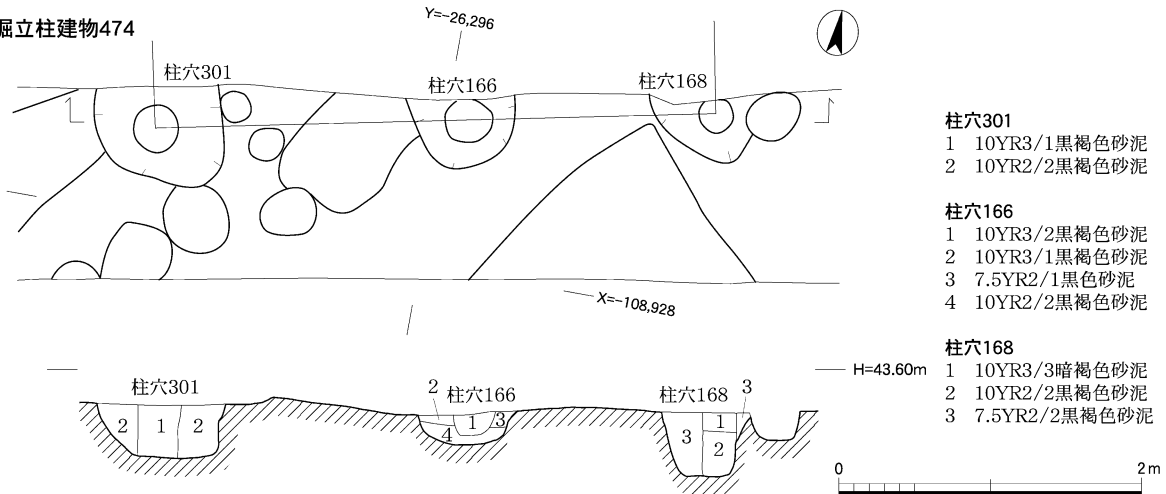


図17 5-3区竪穴住居145・土坑347・掘立柱建物474・ピット149・151~153実測図(1:50)



が0.1 mほど一段落ちの形状である。2・3層は北東隅の壁に沿って斜めに堆積し、焼土が混じり、炉跡の可能性もある。これらの堆積状況から竪穴住居の可能性もある。埋土から飛鳥時代の須恵器、土師器が出土した。

土坑 99(図 16) 土坑 98 の東隣で検出した。遺構の2/3は南壁に延びる。直径0.35～0.4 m、深さ0.05 mで楕円形を呈する。土師器甕が検出面より露出した形で横に据えられていた。性格不明であるが西隣の土坑 98 と関連する遺構の可能性もある。

ピット 442(図 16) 調査区西側で検出した。東西0.75 m、南北約0.2 m以上、深さ0.25 mで、大半は南側に延びる。柱痕跡は直径0.3 mである。埋土から飛鳥時代から奈良時代の須恵器が出土した。

溝 312(図 16) 調査区西側で検出した北西方向の溝である。東西4.3 m、南北1.2 m以上、深さ0.4～0.45 mである。断面形状は逆台形を呈する。埋土から弥生土器、古墳時代から平安時代の土師器、須恵器、瓦が出土した。2006年度調査2C区の溝124の延長に当たる。

溝 139(図 16) 調査区中央の竪穴住居 138 の東で検出した南北方向の溝である。幅1.6 m、深さ0.3 mである。埋土は3層に分かれる。平安時代の土師器、須恵器、瓦が出土した。

#### 5-3区の遺構(図版9・17・18、図17)

竪穴住居 145(図版18-4、図17) 調査区西寄りで検出した。検出したのは住居の北西部で、西辺が1.9 m、北辺が2.1 m分を検出した。深さ0.2 m、覆土が0.13 m、貼り床は0.03～0.05 mの厚さである。壁溝は北辺でのみ検出し、幅0.1～0.38 m、深さ約0.12 mである。住居内で柱穴を3基検出したが、主柱穴と思われるのは柱穴 385 で、直径0.3 m、深さ0.15 m、柱痕跡は直径0.15 mである。住居は東へ33度振れる。埋土から飛鳥時代の須恵器、土師器の小片が出土した。

土坑 347(図 17) 調査区中央西寄りで検出した。検出したのは南西隅の部分で、南辺が0.8 m、東辺が0.7 m、深さ約0.08 mである。埋土を1層掘り下げた面で、肩際に沿ってL字に細い溝を検出した。溝の形態から住居の壁溝と思われ、竪穴住居の可能性もある。出土遺物はないが、西隣の竪穴住居 145 と同じ方向の傾きをしていることから同時代の遺構と思われる。

掘立柱建物 474(図 17) 調査区東端の北壁沿いに検出した。柱穴は3基(166・168・301)で、東西0.7～0.9 m、南北0.4～0.6以上、深さ0.2～0.4 mである。いずれの柱穴も柱痕跡が認められ直径0.2～0.3 mである。柱間は西から1.9 m、1.7 mの東西2間である。調査区が狭いため建物の復元には至らないが、出土遺物から飛鳥時代から奈良時代の建物と思われる。

ピット 149・151～153(図 17) 調査区中央西寄りで検出した。いずれのピットも掘形が0.5～0.7 m、深さ0.3～0.4 mで、直径0.2 m前後の柱痕跡が認められた。調査区が狭いため建物の復元には至らない。

## 4. 遺物

出土した遺物は整理箱で78箱を数え、時代は弥生時代から近世までに及ぶ。出土遺物の多くは鎌倉時代の瓦類が占め、各時代の土器類がみられる。弥生時代中期の土器が少量あり、弥生時代後期から古墳時代中期までの遺物はみられず断絶がある。古墳時代後期から飛鳥時代・奈良時代と続き、平安時代後期から鎌倉時代・室町時代・江戸時代までの遺物が出土した。以下、4区と5区に分けて主要遺構出土の遺物を中心として述べることにする。

### (1) 4区の出土土器

#### 4-1・4-2区出土土器 (図版22、図18)

須恵器杯H (1) は底部をへら起し後、軽く回転へらケズリする。受け部の立ち上がりは低い。TK217 型式に相当する。須恵器杯A (2) は平らな底部から斜め外方へのびる体部をもつ。須恵器高杯 (3) は脚部のみの破片であるが、椀形の杯部が付くと思われる。1は4-2区溝56、2

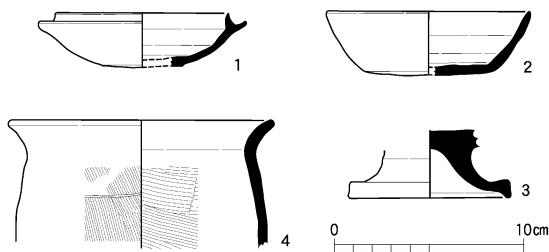


図18 4-1・4-2区出土土器実測図 (1:4)

と3は4-1区土坑279出土。飛鳥時代と思われる。

土師器甕 (4) は体部から口縁部にかけての破片で、くの字形で外反する口縁部がつく。内外面をハケ目調整。4-1区竪穴住居305出土。

#### 4-2区土坑158出土土器 (図版22、図19)

土師器皿A (5・6) は底部から体部へ低く

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ～弥生時代	石鏃 弥生土器	4箱	石鏃1点 弥生土器3点	3箱	0箱
古墳時代	土師器、須恵器	5箱	土師器2点、須恵器3点	4箱	0箱
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器、須恵器、ガラス製品	11箱	土師器16点、須恵器17点、平瓦3点、ガラス製品2点	7箱	1箱
平安時代	土師器、黒色土器、輸入陶磁器、軒瓦	8箱	土師器6点、黒色土器2点、輸入白磁1点、軒平瓦1点	6箱	1箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、軒瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦、石鍋	42箱	土師器16点、瓦器1点、瓦質土器5点、施釉陶器2点、軒丸瓦14点、軒平瓦9点、鬼瓦3点、丸瓦1点、平瓦4点、石鍋2点	25箱	10箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器	10箱	土師器1点、施釉陶器4点、焼締陶器2点	4箱	5箱
合計		80箱	121点 (14箱)	49箱	17箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

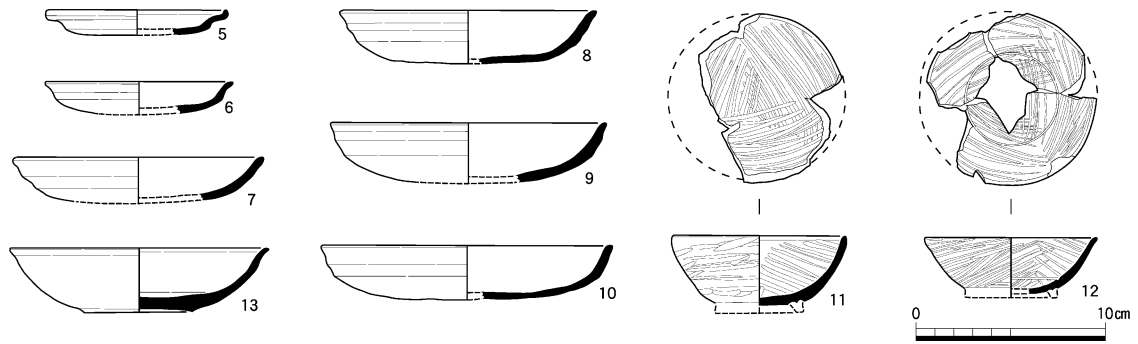


図19 4-2区土坑158出土土器実測図(1:4)

屈曲して立ち上がり、体部から口縁部をさらに外方へ屈曲させている。6は口縁部を小さくつまみ上げておさめる。器壁はまだ薄手が保たれている。底部内面はナデ調整、体部内面は横ナデ調整、外面は体部から底部まではオサエである。5は口径9.4 cm、器高1.3 cmである。

土師器皿N(7~9)は体部が緩やかに外方へ開き、口縁部は外反し、端部は外方を向く。口縁部上面に狭い端面をもつ。口縁部外面に2段の凹みをもつ。底部内面はナデ調整、体部内面は横ナデ調整、外面は体部から底部まではオサエである。皿N(10)は体部が内弯ぎみに口縁部へ立ち上がる。胎土や調整など京域出土の土師器皿とは異なる。

黒色土器B碗(11・12)の11は丸みを持った底部から体部は内弯して口縁部へ立ち上がり、口縁は上方につまみあげて尖る。12は内弯気味に開き、口縁部は外反する。口縁は細い端面を持つ。ロクロ整形で、外面は粗いヘラミガキ、内面は3分割でヘラミガキ。外面は11が3分割、12が4分割でヘラミガキ。ミガキ部分には炭素が吸着し黒光りしている。12は見込み底部に沈線が1条めぐる。底部はヘラ切り痕跡があり、その後高台を貼り付けているが、すべて高台ははずれている。胎土や土器の調整をみると京都では出土例のない黒色土器である。11・12とも口径9.2 cm、高台は欠損し器高は不明である。この他、図示していないが、同様の黒色土器があと2個体出土している。

輸入白磁皿(13)は碁笥高台状の平坦な底部で、体部は内弯ぎみに開き、口縁部手前で内側へ屈折し、口縁部は外反する。底部外面を除き施釉する。乳白色で精良な胎土である。口径13.5 cm、器高3.4 cm、底径5.2 cm。

土坑158出土の一群はIV期新段階(11世紀後半)に属すると思われる。

#### 4-2区池232出土土器(図20)

土師器皿S(14・15)は丸みのある底部から内弯しながら立ち上がり口縁部を丸くおさめる。口縁部外面を幅広くナデ調整する。いわゆる白土器。VI期新段階(13世紀中頃)に属する。池232の西汀線から出土。

#### 4-2区土坑200・池232上層出土土器(図版22、図21)

土師器鍋(16)は丸みをもった浅い底部から体部は開き、口縁部は屈折して外方上へ開く。端部は肥厚し端面をつくる。口径27.4 cm、器高6.6 cm。

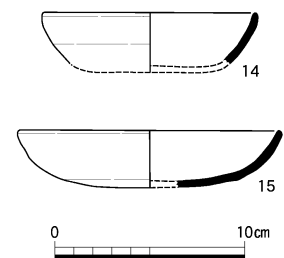


図20 4-2区池232出土土器実測図(1:4)

肥前施釉陶器皿（17）は高台内に兜巾状の小さな突出が残る。高台から胴部下位までは直線的に開き、やや上方へ屈折して口縁部へ至る。口縁部は屈折して平坦面をもち端部は小さくつまみ上げる。見込と高台豊付けに砂目痕がある。内・外面に透明釉を全面に施す。胎土は灰白色の精良な土である。口径 12.8 cm、器高 3.0 cm、底径 4.0 cm。

肥前施釉陶器皿（18）は高台から上向に緩やかに胴部が開き、口縁部に至る。口縁は尖る。見込みの中央は蛇の目状の釉剥ぎである。釉は銅緑釉の上に灰釉を施す。胎土は水漉した精良な灰白色である。口径 13.6 cm、器高 4.6 cm、底径 4.8 cm。

肥前施釉陶器椀（19）は削り出しのアーチ状の高台から胴部境は丸みをもち、口縁部まで立ち上がる。口縁は丸くおさまる。豊付け以外は全面に透明釉を施す。胎土は白色で密である。口径 9.7 cm、器高 7.4 cm、底径 4.9 cm。

京焼風肥前平椀（20）はやや細くなった高台から内弯して浅く開く胴部。見込みには錆絵で山水文を施文し、高台部以外は透明釉を施す。口縁部は欠損する。高台内に刻印がある。胎土は灰白色で水漉した精良である。底径 5.2 cm、口径・器高は不明。

焼締陶器信楽播鉢（21）は平坦な底部から外上方へ直線的に胴部をつくり、口縁部やや湾曲気味に立ち上がる。口縁は水平の端面とする。口縁帯外面には凹線が 2 条巡る。内面には一単位が 8～9 本の播目が全面に施される。体部全面に泥漿が施される。胎土は灰白色で砂粒混じりである。口径 37.0 cm、器高 15.4 cm、底径 15.3 cm。

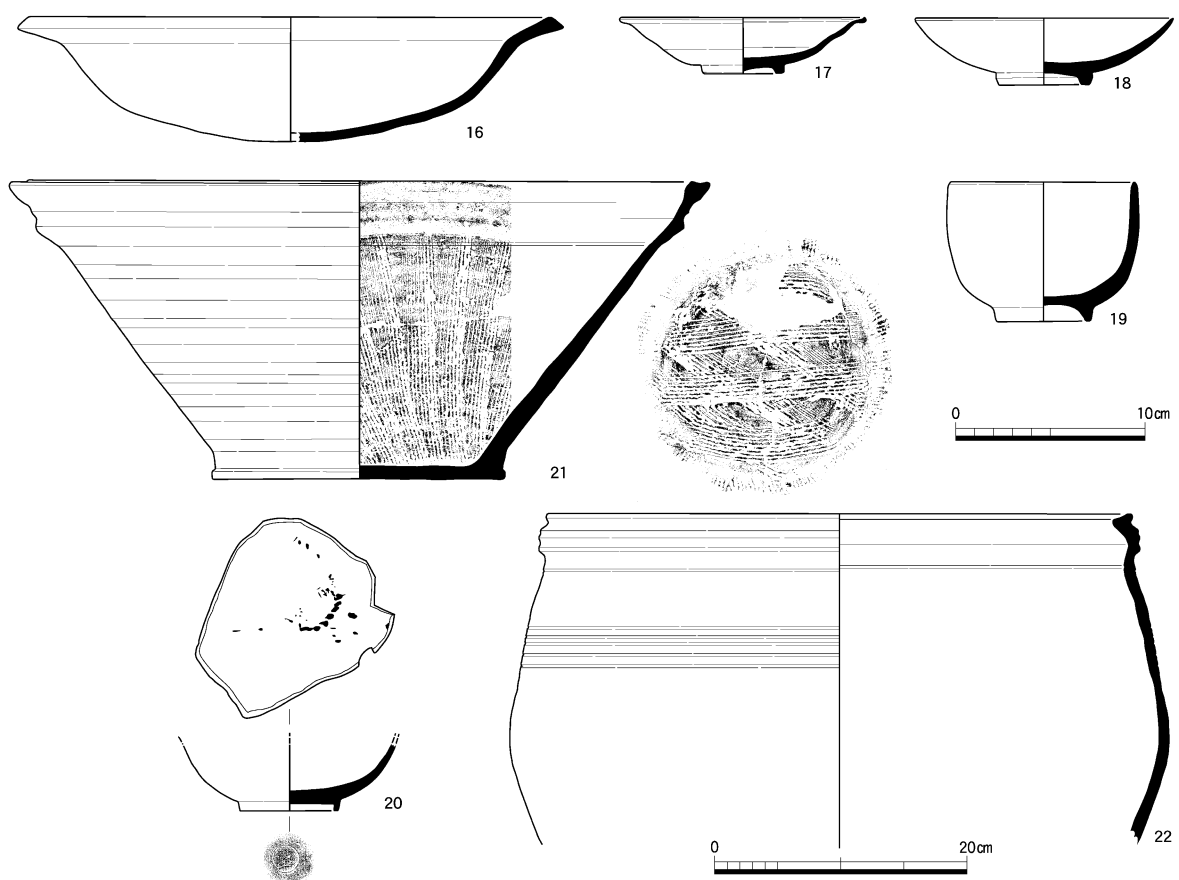


図 21 4-2 区土坑 200・池 232 上層出土土器実測図（1：4、22のみ 1：6）

焼締陶器丹波甕（22）は胴部が内弯し、短い頸部は外方へ屈曲し、口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。口縁端面は内傾する。口縁部外面に3条の凹線、胴部の中位から上部にも凹線が施文される。体部外面には塗土の上に灰釉が施される。胎土は灰褐色で硬質である。口径46.2 cm、器高は不明、口縁部10 cm以下の胴部は欠損する。

16～21は土坑200、22は池232上層から出土し、17世紀後半から18世紀前半に属する。

## （2）5区の出土土器

### 5-1区竪穴住居467出土土器（図版19、図22）

弥生土器無頸壺（23）は口縁部内外面に1条ずつの凹線をいれ、凹線の直下に蓋接続用の小孔を2個穿つ。体部に2条の凹線を施す。底部は欠損して不明であるが、形状からは台付き鉢の可能性もある。体部外面は丁寧なヘラミガキを施す。

弥生土器壺（24）は口縁部のみ遺存。外反する口縁部は端部が下方へ垂れ、外面に櫛描きによる沈線文を、上面には櫛の先端で刺突文を施す。

弥生土器高杯（25）は脚部のみ遺存。外方へ開く脚部先端を下方へ屈曲させ、屈曲部外面に連続して小穴を開ける。穴は貫通していない。

23～25は弥生時代中期（IV様式）に相当する。

### 5-1～5-3区出土土器（図版19、図23）

土師器甕（26・27）は長胴の体部と頸部から口縁部が内弯ぎみに立ち上がり内傾する端面をもつ。26の端面は窪みをもつ。体部内外面は縦方向のハケ目、口縁部内面は横方向のハケ目を施す。口径21.0 cm。5-2区竪穴住居313から出土している。27は体部内外面を縦方向のハケ目の後、底部から胴部付近の外面をヘラケズリする。口径20.2 cm、底部は欠損する。5-2区土坑99出土。2点とも飛鳥時代に属する。

須恵器杯H（28）は受け部が上方へのびるように高く立ち上がり、口縁部は内側に面をつくる。体部外面は底部のみ回転ヘラケズリ。口径12.1 cm、器高4.7 cmを測る。古墳時代後期の6世紀中頃に属する。5-2区竪穴住居313出土。

須恵器杯G（29）は底部から体部は丸みをおび内傾ぎみに立ち上がり、体部半ばで屈折し、外反して口縁部はまるくおさめる。飛鳥時代に属する。5-2区竪穴住居138出土。

須恵器杯A（30～33）は平たい底部に外方へのびる口縁部をもつ。30は口径13.0 cm、器高3.6 cmを測る。5-2区溝312出土。31は口径13.5 cm、器高3.8 cm、5-2区土坑333出土。32は口径12.9 cm、器高3.4 cm、5-2区竪穴住居130出土。33は口径13.7 cm、5-2区竪穴住居313出土。

須恵器杯B蓋（34・35）はどちらも宝珠つまみを欠損している。緩やかにふくらむ天井部に

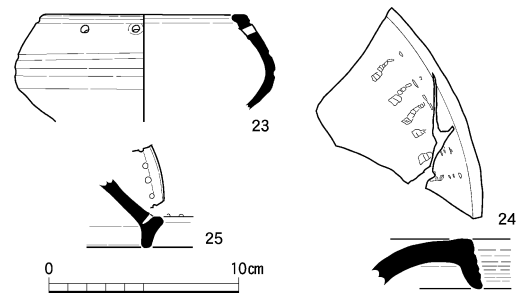


図22 5-1区竪穴住居467出土土器実測図（1：4）

下方へつまみ出す口縁端部をもつ。34は口径14.3cm、5-3区柱穴301出土。35は口径16.6cm、5-2区土坑98出土。

須恵器杯B(36)は平坦な底部で高台は少し外へふんばる。高台端面はやや凹みがみられる。底部から体部へ丸みをもちながら外方へ立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口径17.6cm、器高3.4cm。5-2区ピット442出土。

30～36は奈良時代(平城IV)に属すると思われる。

須恵器甕(37・38)は円球に近い体部とやや外方へ開く頸部、外側へ拡張させた口縁部をもつ。

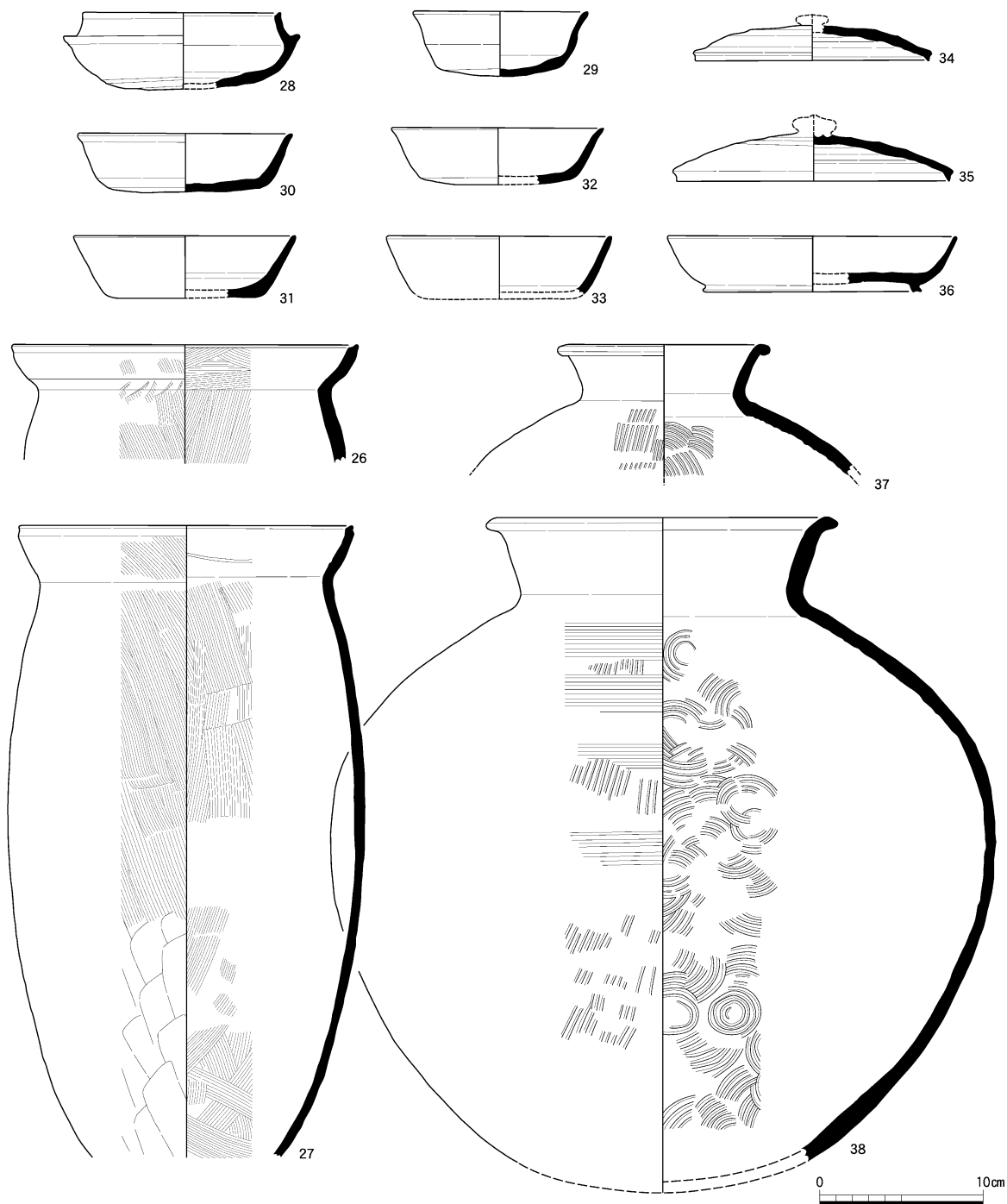


図23 5-1～5-3区出土土器実測図(1:4)

37は体部の外面にタタキ、内面に青海波文を残す。38は外面にタタキの後に横方向のカキ目を施す。37の口径は12.0cmを測り、38は20.5cmと大型品である。37は5-1区段差3、38は5-1区暗褐色砂泥層出土。2点とも飛鳥時代に属すると思われる。

5-1区溝304出土土器(図版20・21、図24)

土師器杯C・高杯・甕C・甑、須恵器杯H・杯H蓋がある。

土師器杯C(39~48)は底部から丸く立ち上がり口縁部内側に端面をつくる。口径によって2種に分けられ、杯CⅡ(45~48)が12.1~13.0cm、杯CⅢ(39~44)は9.5~11.2cmである。胎土に鉄分を多く含み赤褐色を呈するもの(39~42、45~48)と、黄褐色を呈するもの(43・44)がある。赤褐色の杯Cはすべて内面に暗文を施す。外面はナデ調整であるが、48は底部にへ

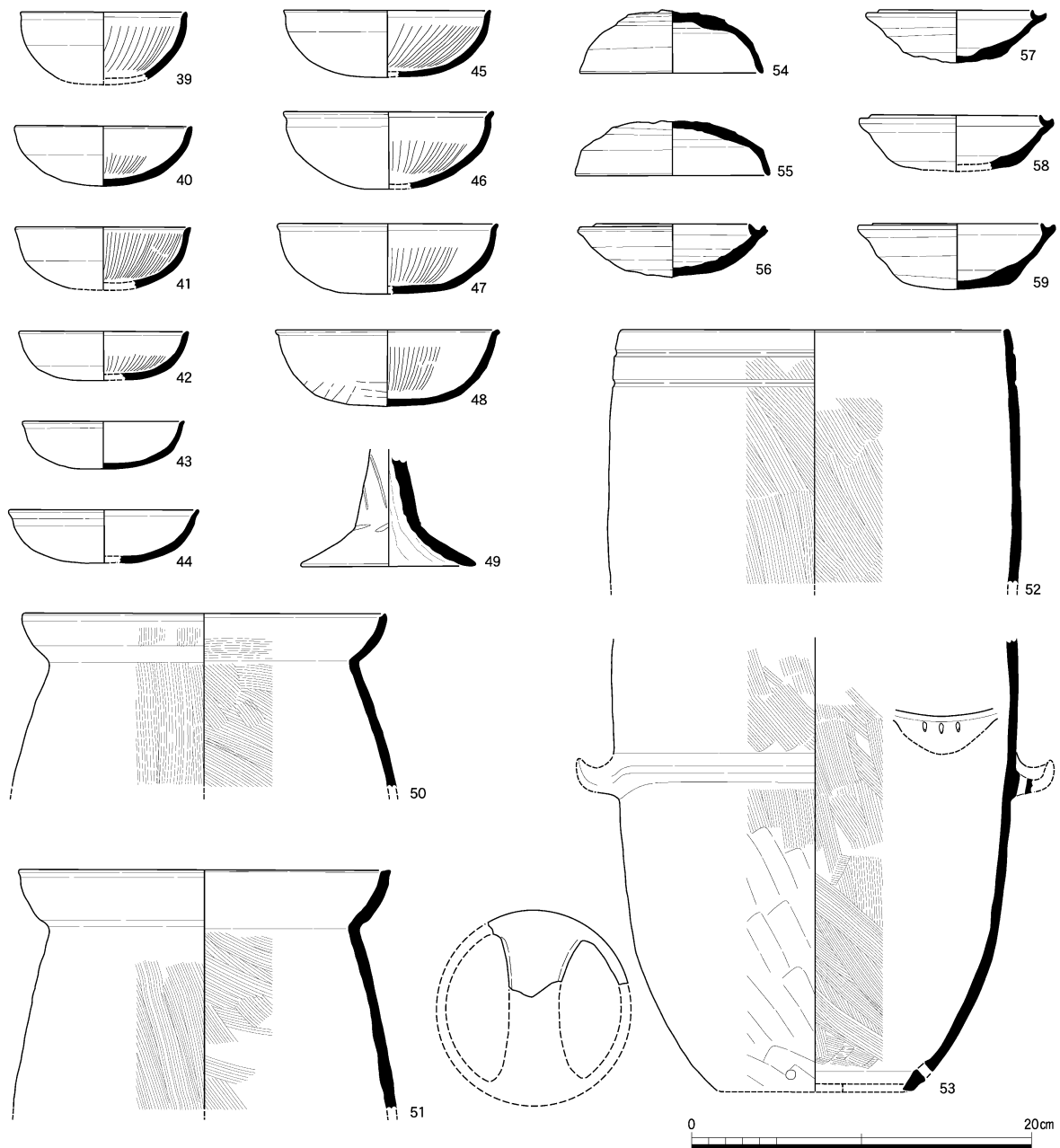


図24 5-1区溝304出土土器実測図(1:4)

ラケズリ痕を残す。45～48は特に赤みを帯び、鉄分の多い土を選んで作っているようである。

土師器高杯(49)は杯部が欠損するが椀形の杯部が付くと思われる。脚部内面に絞り目がつき、外面にはヘラの圧痕が残る。

土師器甕(50・51)は長胴型を呈し、屈曲する頸部はやや内側へ内弯する。口縁部は内傾する端面を作る。体部・頸部は内外面にハケ目を施す。

土師器甕(52・53)は2点とも類例の少ない器形である。52は底部まで遺存していないが、形状からして甕と思われる。直立する口縁部をもち、口縁部直下外面に2条の沈線を施す。体部の内外面をハケ目で調整する。53は口縁部を欠損しているが、52と同様に直立する口縁部と思われる。53は体部に1条の突帯を貼り付け、突帯の上に三角形の取手を左右に2個接着している。取手の接着部は突帯を下方へずらせた後その上に接合。接合部分にはヘラで上から3箇所キザミを施す。底部には透しを入れ、底部から体部の屈曲部に小孔を穿つ。穿孔は直径6mmで4箇所あけている。底部の破片は少なく、透しの形状は不明である。体部外面上半と内面はハケ目調整。体部外面の下半から底部にかけてヘラケズリを行う。

須恵器杯H蓋(54・55)は口径10.7～11.4cm、器高2.8～3.2cmを測る。

須恵器杯H(56～59)は口径8.3～10.0cm、器高3.1～3.9cmといずれも口径や器高が小型化し、杯受け部も低い。杯底部はヘラ起し未調整である。杯Gは出土していない。

これらの土器群の時期は坂田寺SG100の土器群に類似し、飛鳥Ⅱ(7世紀第3四半期)に相当すると思われる。

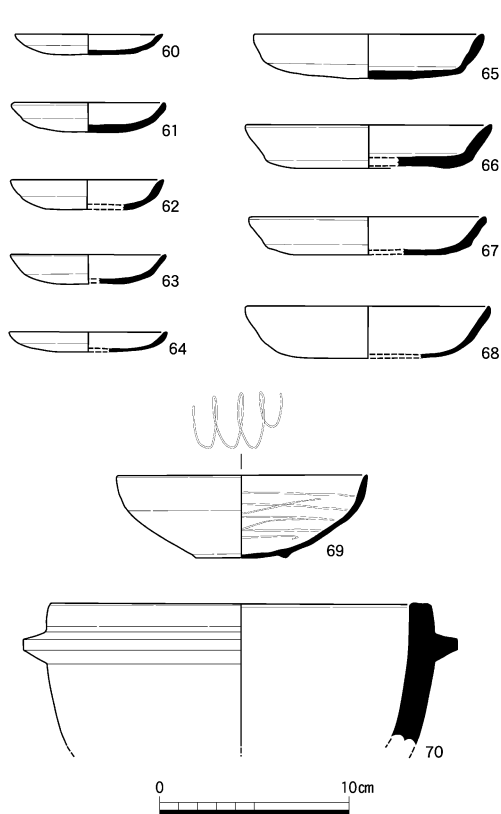


図25 5-1区土坑1出土土器類実測図(1:4)

#### 5-1区土坑1出土土器類(図版21、図25)

土師器皿、瓦器椀、滑石製石鍋がある。

土師器皿(60～68)は口径によって2種に分けられる。大(65～68)は12.1～13.0cm、小(60～64)は7.7～8.4cm。皿小は平らな底部から内弯して立ち上がり、口縁部を丸く収める。皿大は平らな底部から屈曲して立ち上がり、体部外面を広く横ナデ、口縁部を丸く収める。

瓦器椀(69)は小さな高台を貼り付け、外面をナデ調整、内面に粗い暗文を施す。

滑石製石鍋(70)は口縁部から体部へかけての破片で底部を欠く。内弯して立ち上がり、口縁部外面の下に断面台形の鏝を削り出している。体部の器壁は13mmと分厚い。13世紀中頃と思われる。

#### 5-1区出土土器(図版21、図26)

土師器皿N(71・72)は底部から緩やかに内弯して立ち上がり口縁部を丸くおさめる。71は口径



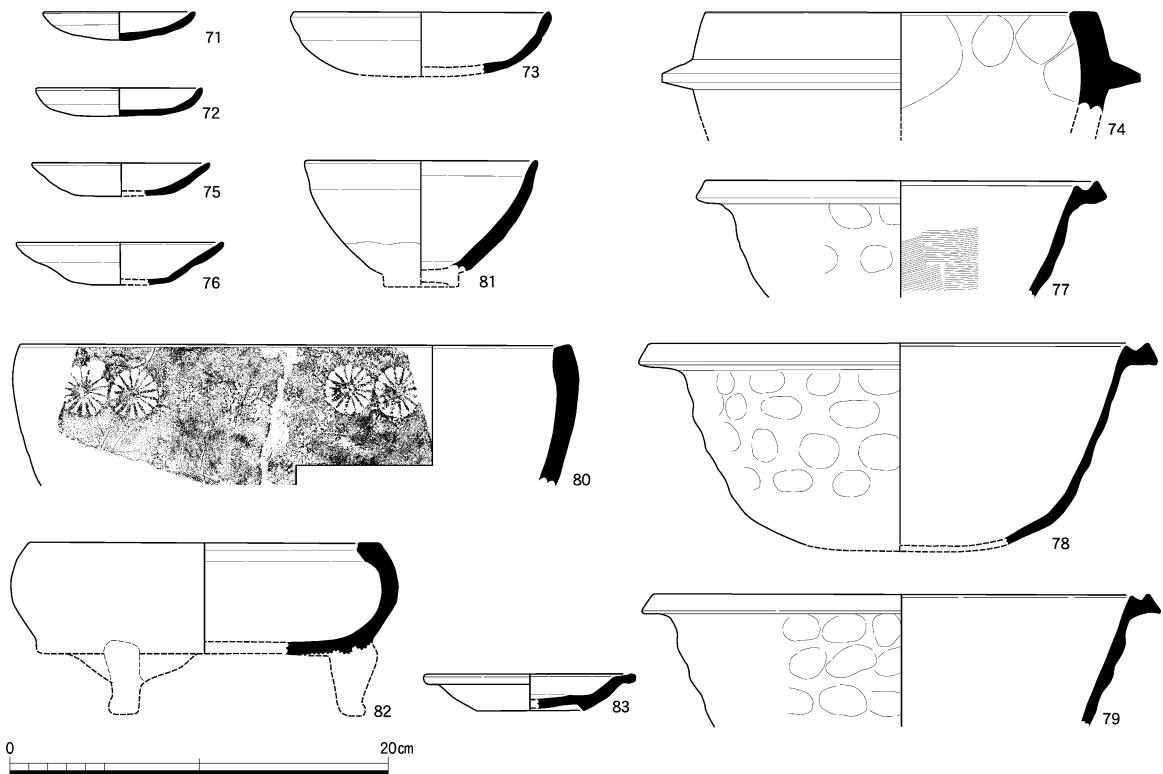


図 26 5-1区出土土器類実測図(1:4)

8.0 cm、器高 1.6 cm。72 が口径 8.8 cm、器高 1.5 cm。2 点ともピット 15 出土。

土師器皿 N (73) は内弯しながら立ち上がり口縁部外面に端面を作る。口径 13.9 cm。滑石製石鍋 (74) は底部を欠き、鏝から口縁部の破片。内弯しながら立ち上がる体部に断面台形の鏝を削り出している。口径 20.5 cm、器壁 1.4 cm。73・74 は落込 170 出土。図示していないが、落込 170 からは、74 とは別個体の滑石製石鍋の底部が 1 点出土している。

溝 39 出土土器 (75～81) には土師器皿、瓦質土器鍋・火鉢、施釉陶器天目茶椀がある。土師器皿 N (75・76) は小さな底部から斜め外方へまっすぐのびる体部、上方へつまむ口縁部からなる。瓦質土器鍋 (77～79) は煮炊具のため、底部を欠損するものが多い。丸い底部から斜め上方へ延びる体部に、横方向へ拡張させる口縁部が付く。口縁部は上方をへこませ蓋の受け部を作る。体部外面は成形時の指頭圧痕が明瞭で凹凸がある。石鍋と同様にいずれも外面に煤が付着しており、使用中に破損し廃棄されたものであろう。77 は内面にハケ目がみられる。瓦質土器火鉢 (80) は奈良火鉢と呼ばれるもので、丸い体部外面に花文のスタンプを押捺している。施釉陶器天目茶椀 (81) は褐釉を浸け掛けし美濃産と思われる。溝 39 出土の一群は 15 世紀の所産と思われる。

土坑 4 出土の瓦質土器火鉢 (82) も 80 と同様に奈良火鉢と呼ばれ、脚部を欠くが、丸い体部に獣脚が付くものと思われる。外面を丁寧にミガキ、獣脚接合部分はヘラでキザミを入れ貼り付けている。15 世紀頃に編年されている。

施釉陶器皿 (83) は削り出しの高台。外へひらく体部に横方向に延びる口縁部が付く。内外面に灰釉を施し釉溜りがみられる。井戸 47 から出土。

### (3) 出土瓦

#### 4-2区出土軒瓦 (図版 23・24、図 27)

84・85は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、同文異範である。瓦当径や中房の大きさが、84は85より小さい。84は1977年調査出土の複弁八葉蓮華文軒丸瓦1と範傷により同範であることが確認できる。84は中房の文様が不明であるが、1977年調査例では中房に「十」が表されている。85も文様が荒れているため文様の細部は不鮮明であるものの、外区に配される珠文帯から1977年調査の複弁八葉蓮華文軒丸瓦3と同範の可能性がある。86・87は複弁蓮華文軒丸瓦である。小破片のため詳細は不明であるが、間弁を単弁で表わす。88・89は左巻き三巴文軒丸瓦。太い巴文と外区に大粒の珠文を表わす。90～92は右巻き三巴文軒丸瓦。細い頭部に長い尾部が巻く。珠文はない。93は森ヶ東瓦窯産と思われる唐草文軒平瓦。簡略な唐草文を右から左へ反転し、内外区を分ける界線と珠文が配される。硬く焼き締まる瓦。平安時代中期に属し、この瓦だけ他より古い。

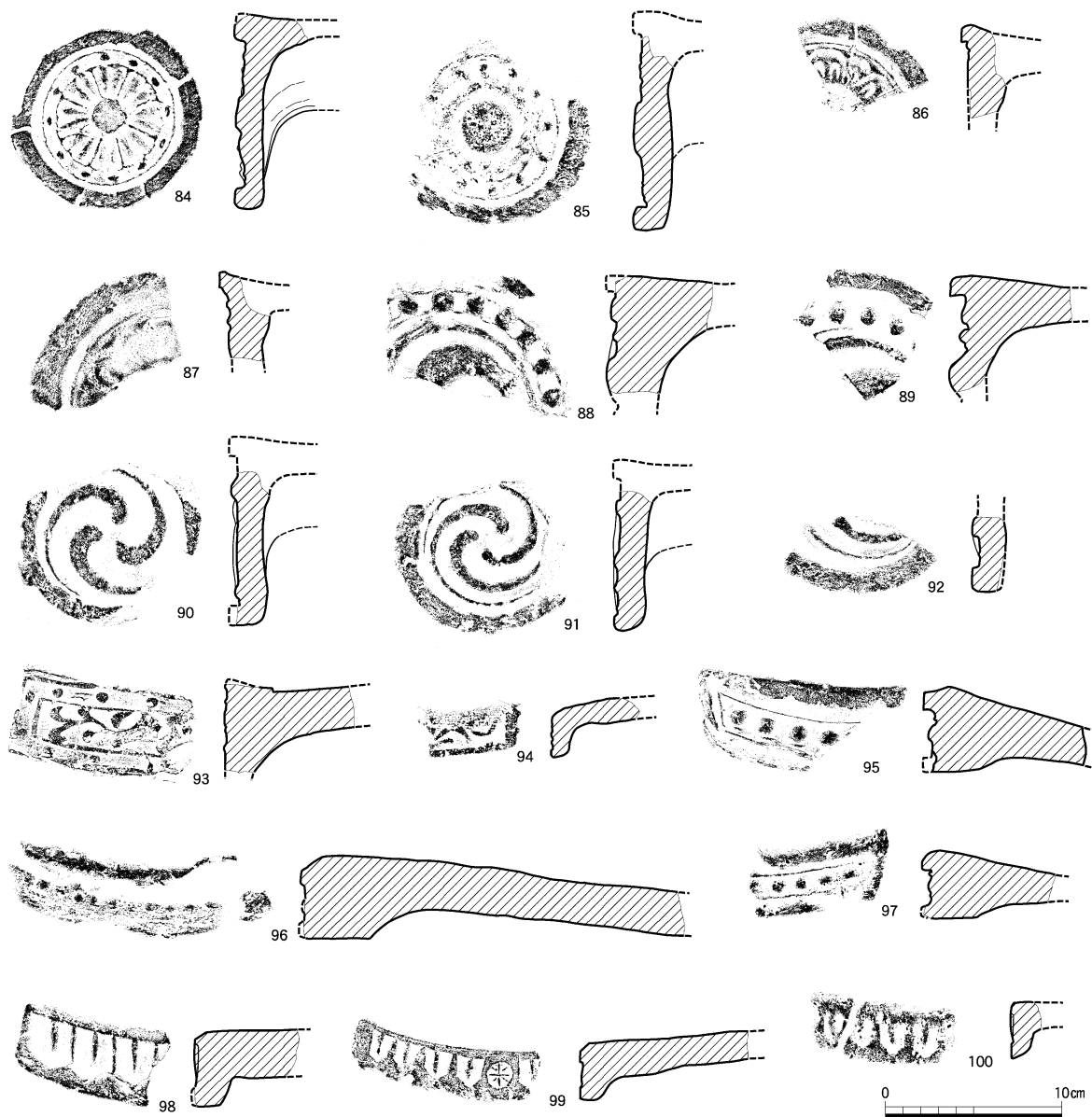


図 27 4-2区出土軒瓦拓影・実測図 (1:4)

94は折り曲げ式の小型唐草文軒平瓦。95～97は連珠文軒平瓦。瓦当厚の違いや連珠文の大きさの違いで3種に分けられる。95は瓦当幅と連珠の大きさが他より大きい。瓦当成形は平瓦の下部に粘土を貼り付けて成形。和泉産の軒平瓦。98～100は剣頭文軒平瓦。いずれも折り曲げ式の瓦当成形。99は中心飾りに「米」印を表わす。1977年調査で中心飾りに「米」印を表す軒平瓦が2種みられ、多数出土しているが、99とは異范である。しかし、出土点数からみて、中房に「十」や「卍」を表す軒丸瓦と組み合う軒平瓦といえる。99・100は98より瓦当幅が小さい。93が平安時代中期、94・100が室町時代、他は鎌倉時代と思われる。

5-1区出土の軒瓦（図版24、図28）

右巻き三巴文軒丸瓦が5種ある。101・102は太い頭部をもち、外区に内外を圏線に挟まれた珠文帯をめぐらす。珠文は大粒で密に配する。103～105は右巻き三巴文の尾部が内外区を分かち界線に接する。外区の珠文は小粒でまばらに配する。106は中心飾りから左を欠くが、菊花唐草文軒平瓦と思われる。中心飾りから唐草が3転する。外区に界線が配される。107は小型剣頭文軒平瓦である。108～110は小型鬼瓦の破片である。108・109は鬼瓦の脚部に相当し、珠文を配する。いずれも鬼面部は不明。4-2区出土瓦と同様、鎌倉時代を中心とする一群である。

4-2・5-1区出土丸瓦・平瓦（図版25・26、図29）

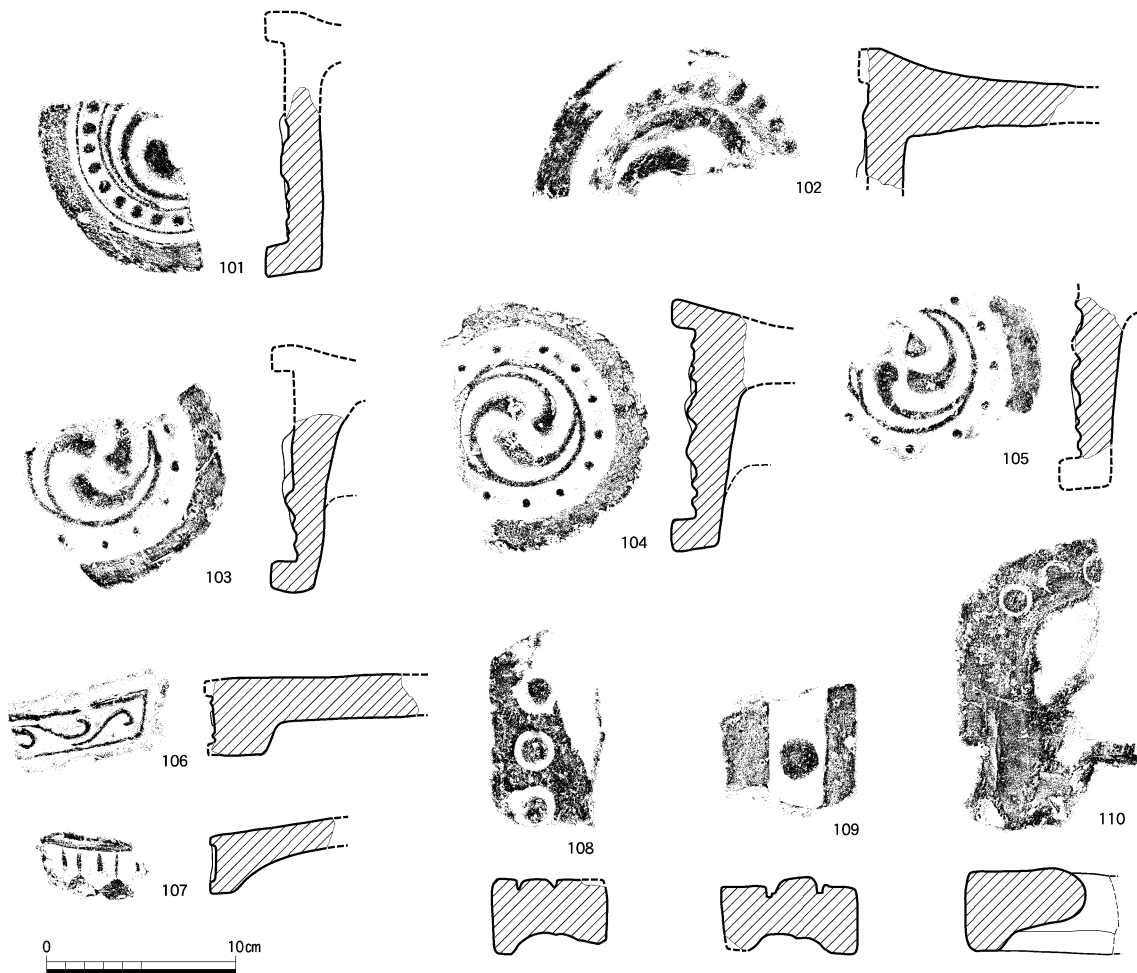


図28 5-1区出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

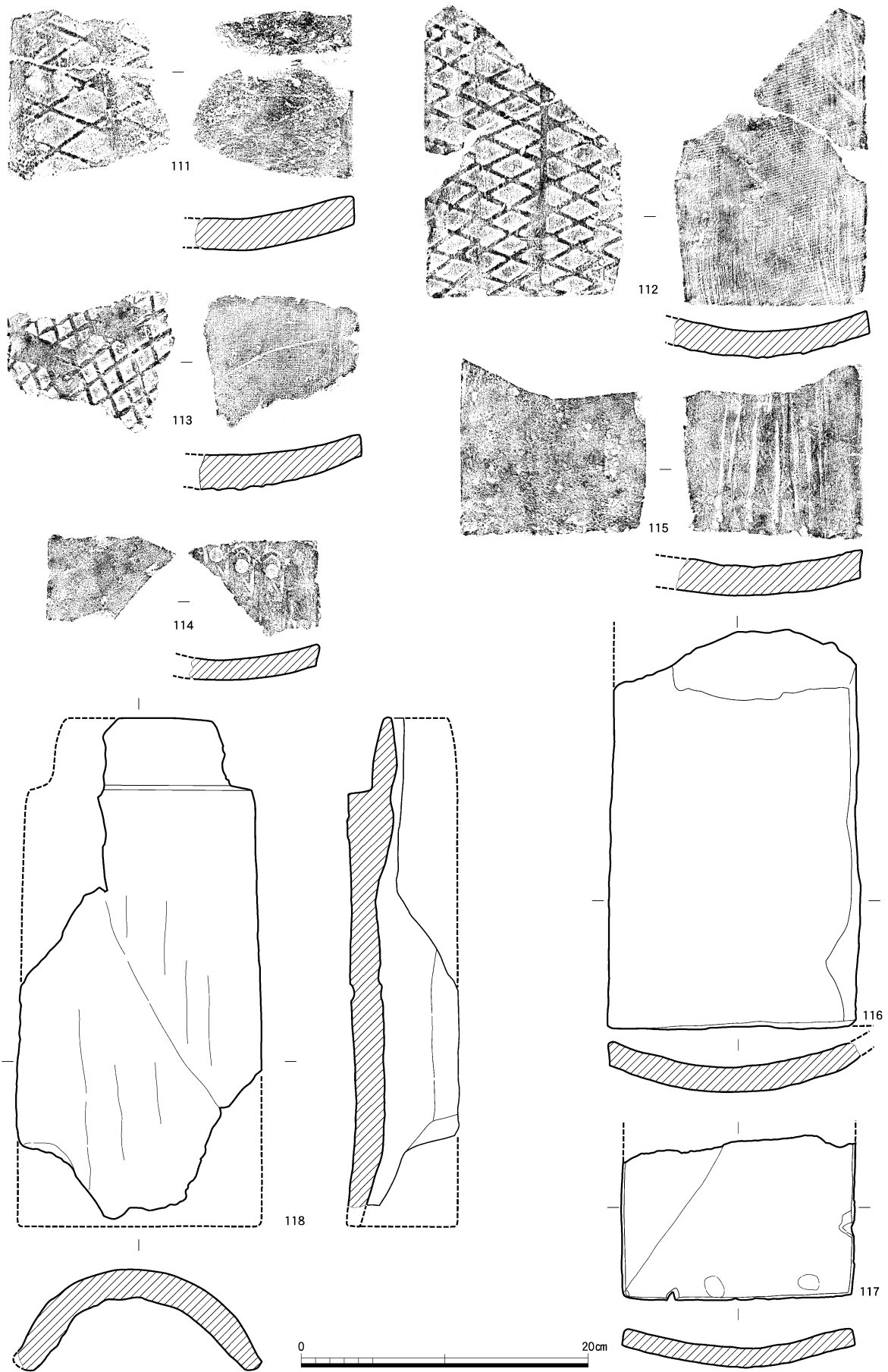


图 29 4-2·5-1区出土丸瓦·平瓦拓影·实测图(1:4)

平瓦（111～113）は外面が格子タタキ、内面に細かい布目を残す。格子はいずれも斜格子で、111が最も大きく112、113の順である。111の凹面には格子のネガ圧痕が残り、積み重ねたものと思われる。111は5-1区、12・13は4-2区出土。

平瓦（114・115）は凸面に離れ砂痕を残し、凹型台を使用。凹面は丁寧にナデ調整と細長い板によるタタキを行っている。114のタタキ板には円形と山形の文様を施している。平瓦（116・117）はほぼ同じ幅で、大棟に用いる熨斗瓦と思われる。117は焼成時からこの幅であるが、116は平瓦を焼成後打ち欠いて成形した割熨斗である。丸瓦（118）は玉縁が付く。外面を縄タタキ後ナデ調整、内面に布目。114～118は鎌倉時代の瓦と思われる。すべて4-2区出土。

#### （4）その他の遺物

##### 5-1区出土の石器（図版22、図30）

119は凹基形の石鏃。黒色のチャート製。縄文土器は出土していないが、縄文時代の石鏃と思われる。幅15.5mm、長さ24.5mm、厚さ5mm。5-1区土坑34から出土。

##### 5-1・5-2区出土のガラス製品（図版22、図30）

120と121はガラス製品。120は深緑色を呈し中が空洞の円球で、胴部に菱形の面取が連続する。上面から見るとほぼ六角形である。両端部が未調整で破断しているようにみえるため、上方と下方に連続し連珠であった可能性がある。通常ガラス玉は型作りか巻き付け技法により成形するが、本例は型吹き技法と思われる。非常に精密で特殊な技法であり、稀少なガラス製品である。直径7mm、高さ7mm、器壁の厚さ0.3mm。古墳時代後期の5-2区竪穴住居313の下層にあたる土坑368から出土している。121は半分欠損しているガラス玉である。青色の中に白色が縞状に入り巻き付け技法である。直径10mm、高さ8mm、孔の直径2mm。5-1区段差3中世層から出土。2点とも飛鳥時代の可能性があり、カリウム鉛ガラスである。

##### 石材の材質

その他に、出土したこぶし大以上の石の材質をみると、4-2区柵303とその周辺の柱穴根石20個の材質は、礫岩2、砂岩12、泥岩4、チャート2と、過半数が砂岩であった。5-1区溝304出土の石材は凝灰岩で、火を受けたようで、赤褐色に変色した部分がある。短辺0.33m、長辺は欠損しているが、0.33m残存している。厚さは一辺0.06mから0.13mの扁平である。5-1区土坑460から出土した5個のこぶし大の石は層状チャートである。これらの産地は特定できないが、京都市周辺ではよく見られる石材である。

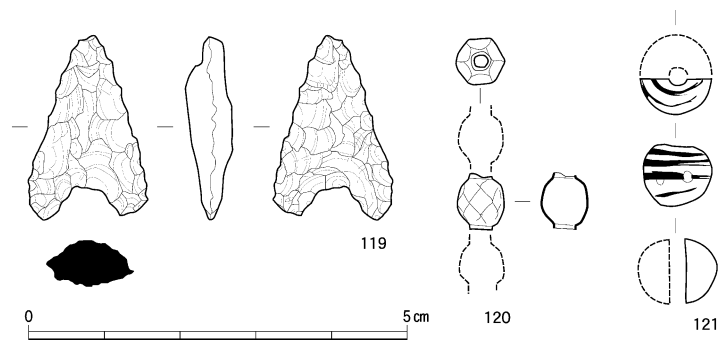


図30 5-1・5-2区出土石器・ガラス製品実測図（1：1）

## 5. まとめ

5区で弥生時代中期の竪穴住居1棟と飛鳥時代の竪穴住居4棟、4区で飛鳥時代の竪穴住居3棟を検出した。弥生時代中期の竪穴住居は京都市内で検出例が少なく、貴重な発見である。直径約8.5mに復元でき、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居に比べ大型である。竪穴住居は弥生時代中期は円形が主流であるが、後期以降に多角形や方形が出現し、その後方形住居に限られてしまう。そして掘立柱建物へと移行する。建物の構造が変化した結果である。この集落は現在の京都市文化市民局発行『京都市遺跡地図』で弥生時代の村ノ内町遺跡と和泉式部町遺跡、古墳時代の常盤仲之町遺跡と一ノ井遺跡に囲まれた空白地帯である。いずれかの遺跡範囲を拡大する必要がある。常盤仲之町遺跡における1977年の調査では古墳時代後期の竪穴住居が24棟、2006年の調査でも弥生時代中期の住居が1棟、飛鳥時代の竪穴住居が6棟検出されている。古墳時代の集落は常盤東ノ町古墳群を囲むように点在していたと想定される。広隆寺の境界は明確になっていないが、集落跡は広隆寺旧境内の範囲内でも多数検出されているため、広隆寺と集落の関係も今後の問題点である。

5区で検出した飛鳥時代の溝304は、2006年度に検出した大石の北側にあたる。前回調査の大石は中世の土坑から見つかったが、石室を解体し石材を放置した古墳の残骸ではという意見もあった。今調査の段差3は肩部に飛鳥時代の遺物が出土するものの東側を中世に削平され、段差が古墳の周溝とはいえないが、段差3と溝304をつなげると大石を囲むように円形になる。もし円墳とすれば墳丘の直径は10m前後に復元でき、石室が南西へ開口する終末期古墳となる可能性があり、常盤東ノ町古墳群で調査されている古墳と同規模となる。地形や遺構の分布からみて5-1区西半が微高地状となっており、北側にある常盤東ノ町古墳群が当該地まで展開しているものと思われる。土坑1で検出されたチャートの石も古墳の石室を中世段階に解体し、邪魔となったため土取穴に埋められた可能性がある。

溝304の土器群は飛鳥Ⅱの貴重な一括資料である。その中にあまり出土例のない形態の甑が2点(52・53)ある。形態や手法からみると、53は内外面ハケメ、底部付近のヘラケズリ(あるいは板ナデ)などの調整は長胴形甕Cに類似する。甕Cの底部を切り取り、平たい底部を貼り付けた後、透かしを入れているようである。口縁部は欠損して不明であるが、一般的な甑のように開き気味に直立して口縁を取めていると思われる。凸帯を貼り付けている甑は存在するが、その上に取手を付けている例はめずらしい。土器の手法や胎土は山城地方の土器と類似するため、当地で作られた土器であろう。52は胴部より下半を欠くため底部は不明であるものの、53と同様に甑と思われる。溝の一部だけの調査であるため、たまたまみつかっていないのかも知れないが、溝304の土器群には須恵器杯H・杯H蓋は多数出土しているが、須恵器杯Gがみられない。常盤仲之町遺跡の集落跡の土器も溝304と近い時期の土器群であり、同じく杯Hは多数出土しているが、杯Gがみられない。常盤仲之町遺跡の特徴なのかも知れない。常盤東ノ町古墳3号墳からは須恵器杯Gと杯G蓋が1点ずつ出土している。

4区で平安時代中期の土坑、5区で奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。遺構の密度が薄いため、

詳述できないが、常盤地区も奈良時代から開発が始まり、平安時代前期には当該地にも貴族の別業が営まれていた可能性がある。調査地の東方、法金剛院周辺には平安時代初頭に清原夏野の別業が営まれ、また、常盤には嵯峨天皇皇子源常の山荘が所在したとされている。

4-2区では鎌倉時代の池、鎌倉時代から室町時代の柵や区画溝などを検出した。調査区北側に隣接した1977年の発掘調査では、鎌倉時代から近世にかけて60基の土壙墓が検出され、墓地であったことが判明している。また、鎌倉時代の瓦もまとまって出土し、建物は不明であるが、寺院(あるいは仏堂)遺構と墓地の可能性もある。本調査の複弁八葉蓮華文軒丸瓦(84)は1977年調査で168個体、85は24個体出土し、常盤仲之町遺跡の一角に建てられていたと想定される仏堂の所用瓦といえる。瓦類は鬼瓦と軒瓦に小型のものが多く、御堂は小さい建物であった可能性がある。4-2区で見つかった鎌倉時代から室町時代にかけての池跡は、平安京内で検出される貴族の寝殿造り系庭園の園池に類似し、寺院の庭園と考えるより、有力者の屋敷に付属する庭園であった可能性が高い。城北街道(宇多野吉祥院線)に面して北に中世寺院、南に貴族の別業が並んでいたと想定しておきたい。2006年度調査と合わせて南北方向の溝が5条検出できた。このうち溝35と39が区画溝に当たると思われる。城北街道から約130mを測り、ほぼ東西1町の幅であろう。柵303は南北を分割する柵列に当たると思われる。『太秦村誌』(大正13年刊)によると江戸時代に城北街道と嵯峨道の交差点南西角に「地藏院」という寺があったと記されている。この「地藏院」が中世寺院の末裔かもしれない。嵯峨道は下立売通(勘解由小路)につながり、昭和45年に新丸太町通が開通するまで嵯峨と京都中心部を結ぶ主要ルートであった。また、嵯峨道と南北に直行する城北街道も太秦から御室を結ぶ古道である。太秦・常盤の条里地割り復元に際して、重要な基準の道路となろう。

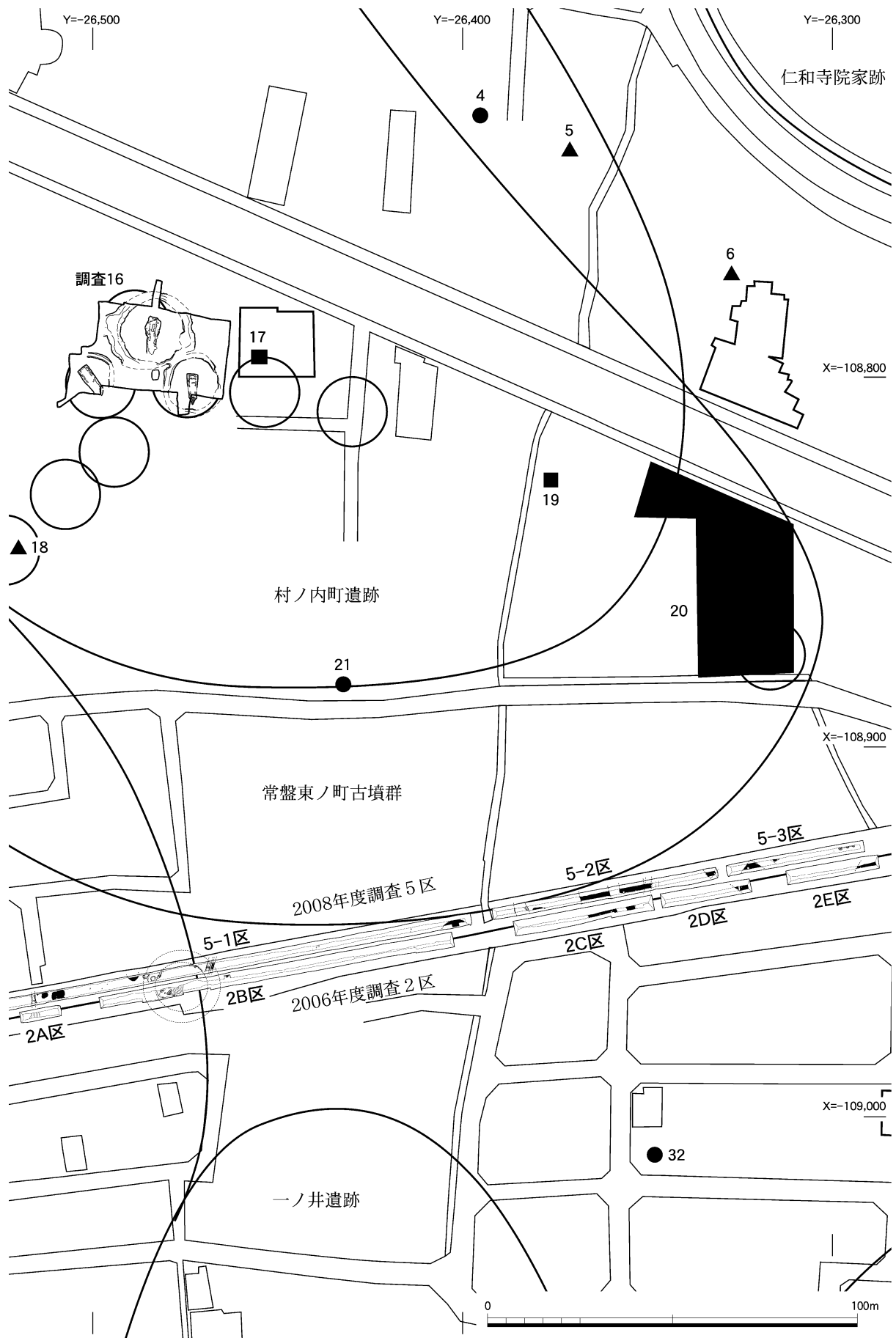
#### 参考文献

- 『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅰ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1977年  
『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年  
『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年



図31 周辺調査位置図 (1:1,500)





## 6. 付章 出土ガラス製品の分析結果報告

### (1) はじめに

調査では、ガラス製品が2点検出された。今回、これらの資料非破壊による調査を行ったので、その結果を報告する。

### (2) 調査方法

一般にガラス製品の製作は、珪石原料とアルカリ硝石、着色材料などを溶解混合して基本的なガラス種を作成する粗煮～精煮工程と、このガラス種を再度加熱して柔軟化させ、(a) 芯材に巻き付けて小玉成形し、表面研磨の調整を行い小玉の製品に仕上げる、もしくは(b) 型吹き成形や切り子カットなどを行いガラス製品に仕上げる、などの成型工程から成り立っている。

今回、これらの器形やガラス色相などを目視観察した後、(1) 個々の資料の基本的なガラス色相と加工調整の工程を知るための実体顕微鏡による微小部観察、(2) 原材料や着色材料などのガラス組成を知るための蛍光X線分析装置による資料非破壊の定性分析、(3) ガラス製品の内部構造を知るためのX線透過観察、にわけた調査を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

#### 出土ガラス製品の微小部観察

基本的な個々のガラス製品の色相・色系統の把握と、ガラスの加工調整に関する微小部観察には、(株) 島津製作所 STZ-40TBIT 型デジタルマイクロスコープを使用して 10～100 倍の拡大観察を行った。さらに、必要箇所については、同機器接続の(株) ミノルタ製デジタルカメラで撮影記録した。

#### ガラス原材料や着色材料などの定性分析

ガラス製小玉の定性分析は、個々の資料を専用の分析試料セル内に装着させ、(株) 堀場製作所 MESA-500 型の蛍光X線分析装置に非破壊で設置して、電子線(X線)を照射し、特性X線を検出した。

検出される元素のうち、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、S(硫黄)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Co(コバルト)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)、As(砒素)、Sn(スズ)、Pb(鉛)の二次電子線強度をカウントした。なお分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、励起電圧は15kV、管電流は300 $\mu$ A、検出強度は10,000～100,000cps、定量補正法はスタンダードレスの設定条件である。

#### 内部構造の観察

今回のガラス製品は、いずれも製作過程の気泡が目視観察されるとともに、このうちの1点は内部が中空洞である。そのため、これらの内部構造を調査することが必要と考え、(独) 国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター・保存修復科学研究所のご協力を得て、同研究室設置の(株) フジフィルム社製 FX-1000 型マイクロフォーカスX線拡大撮像システムのX線照射装置に、SR-2025 型イメージングプレート読取器を取り付けた BAS-5000 型イメージングアナ

ライザーを連動させて画像撮影を行った。設定条件は、電圧 30kV、電流 30  $\mu$  A、透過撮影時間 60 秒である。なお、一連の X 線透過撮影調査は、京都大学人間環境学研究所大学院の田村朋子氏にお願いした。

### (3) 調査結果

今回調査を行った出土ガラス製品は、透明感がある緑もしくは萌黄 (Green) 系を呈する中空洞の連玉型の試料No.1 (120) と、透明感がある青色 (Blue) と乳白濁した青色が未融和状態で固塊した円磨度が良好な小塊片の試料No.2 (121) の合計 2 点である。これらの調査対象資料について一連の観察および分析調査の結果、以下の知見を得た。

1) 資料No.1 (120) は、実体顕微鏡による微小部観察の結果、ガラス型成形時の引張り作業に伴う細長状の気泡が器壁内の細長状の気泡が観察されるとともに、器壁表面には型吹き成形の鑄型と考えられる八角の面取り調整痕が観察された。また、凸型を呈する穴両端は、数連ねた連玉を一点ずつカットしたと考えられるシャープな切れ口も観察された (図 34 120-1 ~ 3)。

2) この資料を X 線透過撮影した結果、連玉中央の膨らみ部分の壁厚が極めて薄いことが確認されるとともに、上記の引っ張り気泡や面取り調整の痕跡も明確に観察された (図 34 120-4・5)。そのためこの資料は、ガラス鑄型を用いた吹きガラスである可能性が高いと理解した。

3) この資料の無機構成元素を分析した結果、ガラスの主成分であるシリカ (Si)、カリウム (K)、鉛 (Pb) 成分のほか、銅 (Cu) とクロム (Cr) 成分も比較的強く検出された。そのため、本資料はカリウム鉛ガラスであり、着色材としてクロム (Cr) および銅成分を使用して、緑もしくは萌黄 (Green) 色の発色を得たものと理解した (図 32)。

4) 資料No.2 (121) は、実体顕微鏡による微小部観察の結果、表面に円球状の発泡痕跡が多数観察された (図 34 121-1 ~ 3)。一方、X 線透過撮影観察を行った結果、器壁内にも多数の円球状の気泡が多数存在することが確認された (図 34 121-4・5)。

5) この資料の透明感がある青色 (Blue) と青い乳濁色系部分の無機構成元素をそれぞれ分析した結果、いずれもガラスの主成分であるシリカ (Si)、カリウム (K)、鉛 (Pb) 成分のほか、銅 (Cu) が比較的強く検出され、両者の差はほとんど見出されなかった。そのため、本資料はカリウム鉛ガラスであり、着色材として銅 (Cu) 成分が使用されていたと理解した (図 33)。

6) いずれにしてもこの資料No.2 (121) は、発泡痕跡を多く含む透明感がある青色 (Blue) と乳白濁した青色が未融和状態で固塊した円磨度が良好な小塊片である。そのため、この資料は完成された製品というよりは、ガラス製品を作成する前段階のガラス種という可能性も想定される。

この一連の調査を行うにあたり、(独) 国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センターの肥塚隆保センター長、同保存修復科学研究室の高妻洋成室長、京都大学大学院人間環境学研究所の田村朋子氏らには、分析調査に関するご協力を頂くとともに、古代ガラス製品の文化財科学的な解釈に関する御教示を得た。厚く御礼申し上げます。

(引用文献)

- 1 土屋良雄 (1987) 『日本のガラス』 しこうしゃ
- 2 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』 思文閣出版
- 3 棚橋淳二 (1989) 「江戸時代の技法によるガラス素地の製造」『研究紀要 第31号』松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学 学術研究会
- 4 肥塚隆保 (1997) 『日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究』東京藝術大学
- 5 北野信彦 (2004) 「出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査」『平安京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所

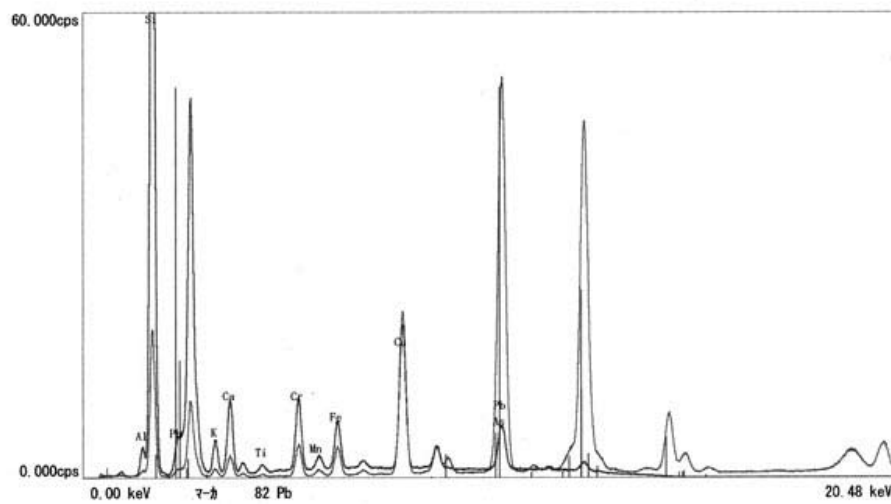


図 32 蛍光 X 線分析 試料No.1 (120)

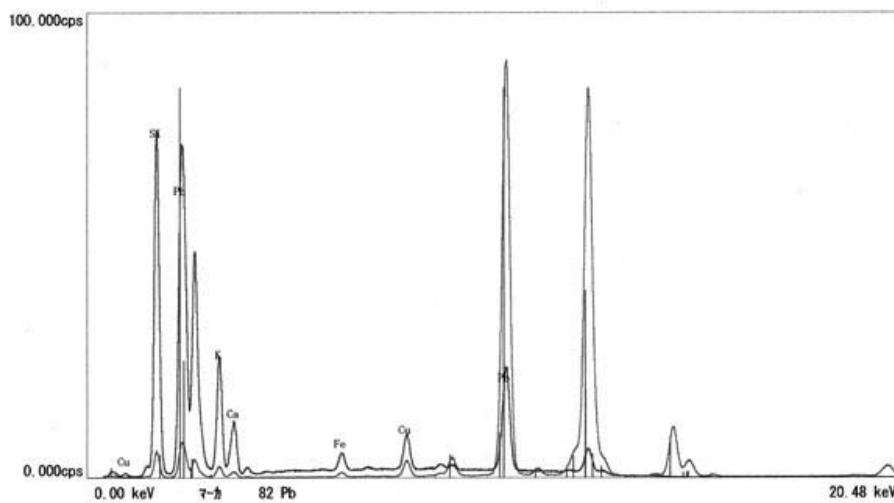
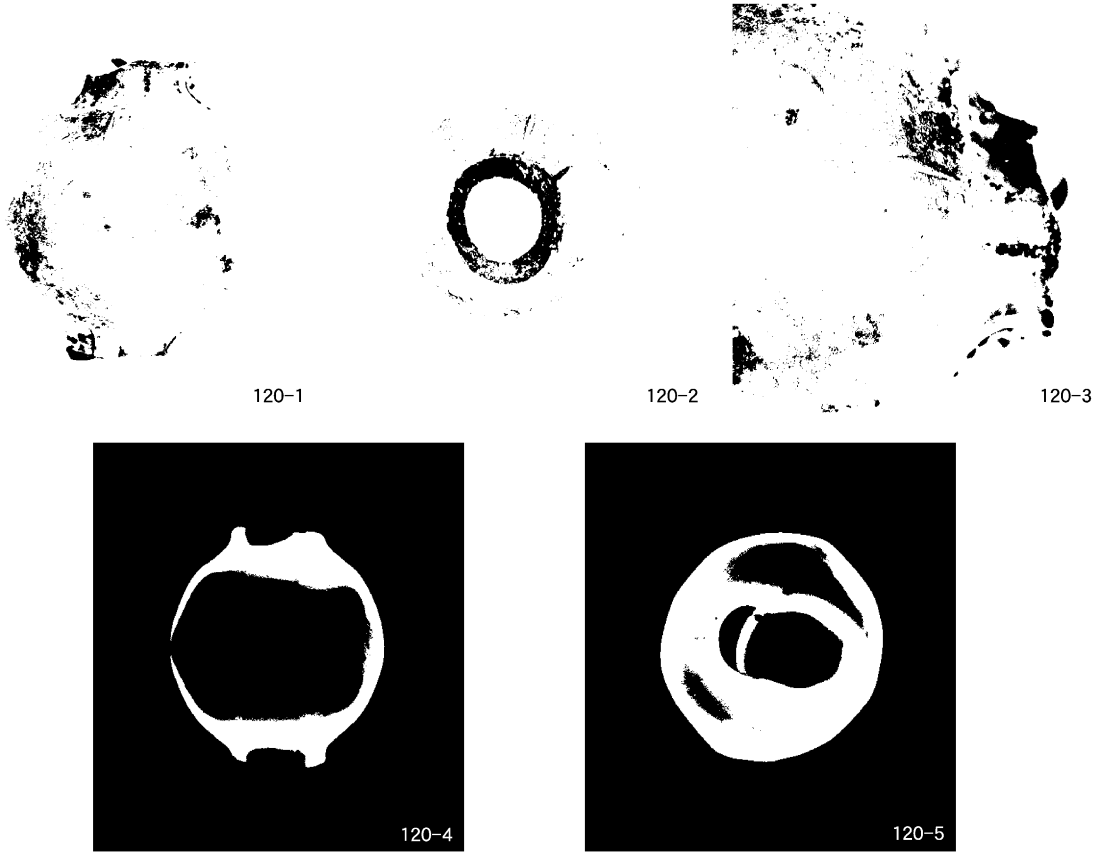


図 33 蛍光 X 線分析 試料No.2 (121)

試料No.1 (120)



試料No.2 (121)

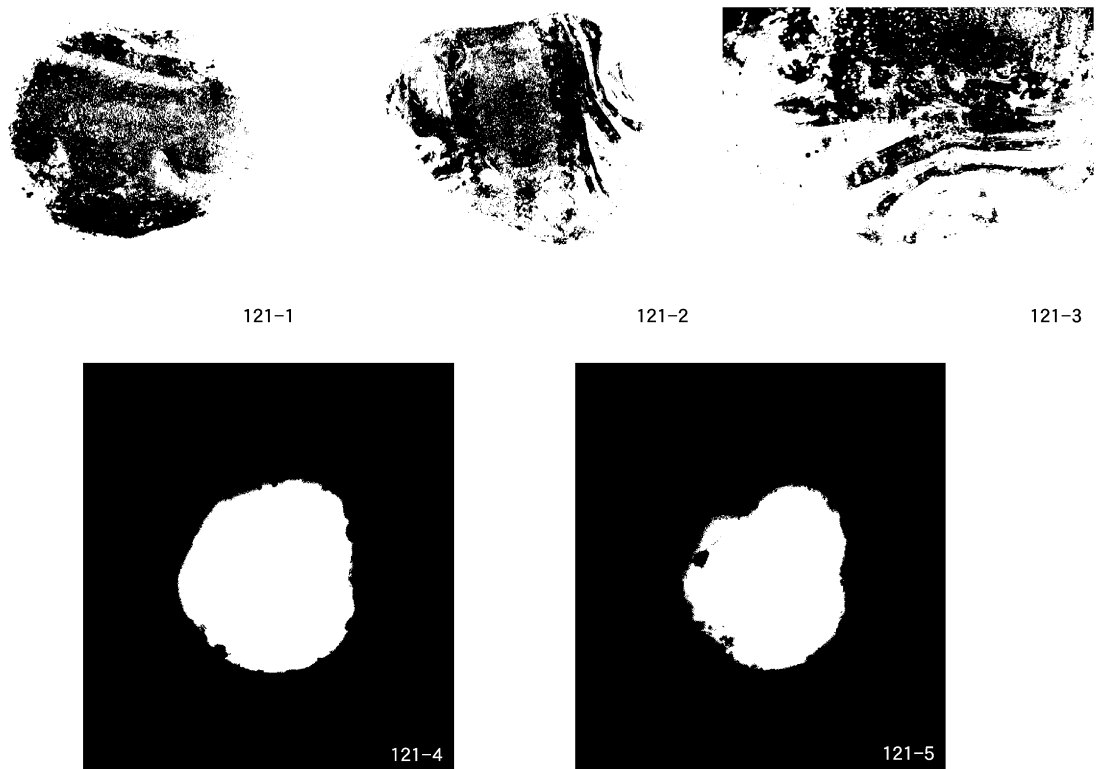


図 34 顕微鏡写真・X線写真 試料No.1 (120-1 ~ 5)、試料No.2 (121-1 ~ 5)

表4 出土土器観察表

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器	杯	4-2区 溝56	9.1	2.9		緻密	良好	2.5Y6/3にぶい橙色	20%
2	須恵器	杯	4-1区 土坑279	10.7	3.4		長石粒	良好	5Y6/1灰色	50%
3	須恵器	高杯	4-1区 土坑279			8.5	長石粒・黒色粒	良好	2.5Y6/2灰褐色	30%
4	土師器	甗	4-1区 竪穴住居305	13.6			微砂粒少量	軟質	2.5YR6/3にぶい黄褐色	20%
5	土師器	皿	4-2区 土坑158	9.4	1.3		緻密	軟質	5YR7/4にぶい橙色	15%
6	土師器	皿	4-2区 土坑158	9.8			砂粒少量	やや軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	35%
7	土師器	皿	4-2区 土坑158	12.8			砂粒少量	軟質	10YR7/4にぶい黄橙色	15%
8	土師器	皿	4-2区 土坑158	13.4	2.8		砂粒(クサレ礫)	やや軟質	10YR7/3にぶい黄橙色	10%
9	土師器	皿	4-2区 土坑158	14.5			砂粒(クサレ礫)	やや軟質	10YR7/4にぶい黄橙色	10%
10	土師器	皿	4-2区 土坑158	15.4	2.8		砂粒少量	やや軟質	2.5Y7/3橙色	30%
11	黒色土器	椀	4-2区 土坑158	9.2			緻密	良好	10YR3/1オリーブ黒色	25%
12	黒色土器	椀	4-2区 土坑158	9.2			緻密	良好	10YR3/1オリーブ黒色	30%
13	白磁	皿	4-2区 土坑158	13.5	3.4	5.2	精良	良好	2.5Y7/2灰黄色	10%
14	土師器	皿	4-2区 池232	11.1			精良	やや軟質	10YR8/3浅黄橙色	白土器20%
15	土師器	皿	4-2区 池232	13.6	3.0		精良	やや軟質	10YR8/3浅黄橙色	白土器5%
16	土師器	鍋	4-2区 土坑200	27.4	6.6		チャート(赤色粒)	やや軟質	10YR6/4にぶい黄橙色	60%
17	陶器(肥前)	皿	4-2区 土坑200	12.8	3.0	4.0	緻密	良好	2.5YR6/2灰黄色	10%
18	陶器(肥前)	皿	4-2区 土坑200	13.6	4.6	4.8	緻密	良好	2.5Y7/3浅黄色、釉緑色	40%
19	陶器(肥前)	椀	4-2区 土坑200	9.7	7.4	4.9	精良	良好	2.5Y6/3にぶい黄色	30%
20	陶器(肥前)	椀	4-2区 土坑200			5.2	精良	良好	2.5Y7/3浅黄色	
21	焼締(信楽)	播鉢	4-2区 土坑200	37.0	15.4	15.3	長石・小石	良好	10YR7/2にぶい黄橙色	10%
22	焼締(丹波)	大甗	4-2区 池232	46.2			長石少量	硬質	7.5YR2/2灰褐色	15%
23	弥生土器	無頸壺	5-1区 竪穴住居467	10.6			赤色粒(チャート)	良好	10YR7/3にぶい黄橙色	45%
24	弥生土器	壺	5-1区 竪穴住居467				赤色粒(チャート)	やや軟質	10YR6/4にぶい黄橙色	
25	弥生土器	高杯	5-1区 竪穴住居467				長石粒少量	良好	10YR7/4にぶい黄橙色	
26	土師器	甗	5-2区 竪穴住居313	21.0			長石粒	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	15%
27	土師器	甗	5-2区 土坑99	20.2			長石粒	良好	10YR6/3にぶい黄橙色	20%
28	須恵器	杯	5-2区 竪穴住居313	12.1	4.7		長石・石英少量	良好	5P B6/1青灰色	70%
29	須恵器	杯	5-2区 竪穴住居138	10.6	4.0		長石粒多い	やや軟質	10YR6/1褐灰色	30%
30	須恵器	杯	5-2区 溝312	13.0	3.6		長石粒極少量	良好	5Y7/1灰白色	25%
31	須恵器	杯	5-2区 土坑333	13.5	3.8		砂粒少量	良好	10YR7/1灰白色	10%
32	須恵器	杯	5-2区 竪穴住居130	12.9	3.4		緻密	良好	7.5Y7/1灰白色	10%
33	須恵器	杯	5-2区 竪穴住居313	13.7			緻密	良好	7.5Y6/1灰色	25%
34	須恵器	蓋	5-3区 柱穴301	14.3			長石粒少量	良好	5Y6/1灰色	20%
35	須恵器	蓋	5-2区 土坑98	16.6			長石粒多い	良好	7.5Y6/1灰色	30%
36	須恵器	杯	5-2区 ヒット442	17.6	3.4		長石粒	良好	2.5GY6/1オリーブ灰色	10%
37	須恵器	甗	5-1区 段差3	12.0			黒色粒(チャート)	軟質	10Y6/1灰色	15%
38	須恵器	甗	5-1区 暗褐色砂泥層	20.5			長石粒少量	やや軟質	10YR6/4にぶい黄橙色	100%
39	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	9.6			微砂粒少量	良好	5YR5/4にぶい赤褐色	25%
40	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	10.4	3.6		長石粒少量	良好	5YR6/4にぶい橙色	40%
41	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	10.3			緻密	良好	7.5YR6/4にぶい橙色	15%
42	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	9.8	2.9		緻密	良好	5YR6/6橙色	25%

No	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
43	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	9.5	2.8		砂粒少量	軟質	7.5YR6/4にぶい橙色	25%
44	土師器	杯CⅢ	5-1区 溝304	11.2	3.2		長石粒少量	良好	5YR5/6明赤褐色	10%
45	土師器	杯CⅡ	5-1区 溝304	12.1	3.9		微砂粒少量	良好	5YR5/4にぶい赤褐色	25%
46	土師器	杯CⅡ	5-1区 溝304	12.2	4.5		砂粒少量	良好	5YR4/4にぶい赤褐色	10%
47	土師器	杯CⅡ	5-1区 溝304	12.8	4.1		長石粒	良好	2.5YR5/6明赤褐色	10%
48	土師器	杯CⅡ	5-1区 溝304	13.0	4.5		緻密	軟質	2.5YR4/3にぶい赤褐色	60%
49	土師器	高杯	5-1区 溝304			10.0	砂粒少量	やや軟質	5Y5/6明赤褐色	90%
50	土師器	甕	5-1区 溝304	21.1			クサレ(チャート)礫	良好	10YR7/3にぶい黄橙色	30%
51	土師器	甕	5-1区 溝304	21.7			長石粒	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	25%
52	土師器	甌	5-1区 溝304	22.6			緻密	やや軟質	10YR7/4にぶい黄褐色	35%
53	土師器	甌	5-1区 溝304			9.5	砂粒	やや軟質	10YR7/4にぶい黄褐色	突帯・取手付き
54	須恵器	杯H蓋	5-1区 溝304	10.7	2.8		長石粒	良好	5Y6/1灰色	25%
55	須恵器	杯H蓋	5-1区 溝304	11.4	3.2		緻密	良好	2.5Y7/1灰白色	50%
56	須恵器	杯H	5-1区 溝304	9.0	3.1		長石まばら	良好	N5/1灰色	100%
57	須恵器	杯H	5-1区 溝304	9.1	3.1		長石少量	良好	5Y6/1灰色	50%
58	須恵器	杯H	5-1区 溝304	10.0			長石少量	良好	5Y6/1灰色	35%
59	須恵器	杯H	5-1区 溝304	10.0	3.9		長石粒	良好	7.5Y6/1灰色	65%
60	土師器	皿	5-1区 土坑1	7.7	1.1		緻密	やや軟質	10YR7/4にぶい黄褐色	25%
61	土師器	皿	5-1区 土坑1	8.0	1.6		長石・チャート	良好	10YR7/4にぶい黄褐色	100%
62	土師器	皿	5-1区 土坑1	8.1			精良	良好	10YR8/3浅黄褐色	25%
63	土師器	皿	5-1区 土坑1	8.2	1.5		緻密	やや軟質	10YR7/3にぶい黄褐色	50%
64	土師器	皿	5-1区 土坑1	8.4	1.1		緻密	良好	10YR7/3にぶい黄褐色	15%
65	土師器	皿	5-1区 土坑1	12.1	2.4		黒色粒・長石	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	85%
66	土師器	皿	5-1区 土坑1	13.0	2.3		緻密	良好	7.5YR7/4にぶい橙色	10%
67	土師器	皿	5-1区 土坑1	12.4	2.1		長石少量	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	50%
68	土師器	皿	5-1区 土坑1	12.8			砂粒少量	軟質	10YR8/2灰白色	白土器25%
69	瓦器	椀	5-1区 土坑1	13.2	4.4	4.8	長石少量	軟質	10Y5/1灰色	55%
70	滑石製	石鍋	5-1区 土坑1	20.0					2.5Y7/2灰黄色	15%
71	土師器	皿	5-1区 ピット15	8.0	1.6		チャート少量	やや軟質	10YR6/4にぶい黄褐色	80%
72	土師器	皿	5-1区 ピット15	8.8	1.5		長石少量	やや軟質	7.5YR7/4にぶい橙色	55%
73	土師器	皿	5-1区 落込170	13.9			緻密	やや軟質	7.5YR7/3にぶい橙色	10%
74	滑石製	石鍋	5-1区 落込170	20.5					10YR6/2灰黄褐色	10%
75	土師器	皿	5-1区 溝39	9.4			砂粒極少量	軟質	10YR8/2灰白色	白土器15%
76	土師器	皿	5-1区 溝39	10.9			緻密	軟質	10YR8/3浅黄褐色	白土器15%
77	瓦質土器	鍋	5-1区 溝39	20.4			砂粒	良好	7.5YR7/3にぶい橙色	15%
78	瓦質土器	鍋	5-1区 溝39	26.3			砂粒極少量	やや軟質	7.5Y7/1灰白色	100%
79	瓦質土器	鍋	5-1区 溝39	26.2			砂粒少量	やや軟質	5Y7/2灰白色	20%
80	瓦質土器	火鉢	5-1区 溝39	29.0			混入物少なく粗い	やや軟質	7.5Y4/1灰色	20%
81	施釉陶器	天目椀	5-1区 溝39	12.2			緻密	良好	5Y7/1灰白色	30%
82	瓦質土器	火鉢	5-1区 土坑4	18.4			混入物少なく粗い	良好	H4/0灰色	獣脚欠損45%
83	施釉陶器	皿	5-1区 井戸47	11.2	2.0		砂粒少量	良好	7.5YR7/3にぶい橙色	20%

表5 出土瓦観察表

No	種類	出土遺構	胎土	焼成	色調	備考
84	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	4-2区 溝164	長石	やや軟質	7.5Y5/2暗灰黄色	
85	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	4-2区 溝164	長石・石英多量	軟質	7.5YR7/6橙色	
86	複弁蓮華文軒丸瓦	4-2区 池232		軟質	2.5Y6/2灰黄色	
87	複弁蓮華文軒丸瓦	4-2区 池232	砂粒少量	軟質	2.5Y7/1灰白色	
88	左巻三巴文軒丸瓦	4-2区 落込み	精良	軟質	2.5Y7/2灰黄色	
89	左巻三巴文軒丸瓦	4-2区 北壁28層	精良	硬質	N5/1灰色	
90	右巻三巴文軒丸瓦	4-2区 側溝	長石	やや軟質	10Y4/1灰色	
91	右巻三巴文軒丸瓦	4-2区 北壁33層	長石まばら	軟質	10YR6/3にぶい黄橙色	
92	右巻三巴文軒丸瓦	4-2区 北壁33層	長石	軟質	2.5Y6/3にぶい黄橙色	
93	唐草文軒平瓦	4-2区 溝251	小石・長石・黒色粒	硬質	N5/1灰色	
94	唐草文軒平瓦	4-2区 溝164	長石・石英	軟質	10YR7/4にぶい黄橙色	
95	連珠文軒平瓦	4-2区 北壁28層	精良	良好	2.5Y8/1灰白色	
96	連珠文軒平瓦	4-2区 溝56	小石少量	軟質	2.5Y8/1灰白色	
97	連珠文軒平瓦	4-2区 汀245	長石粒多い	硬質	2.5Y6/1黄灰色	
98	唐草文軒平瓦	4-2区 池232	長石粒多い	硬質	2.5Y6/1黄灰色	
99	剣頭文軒平瓦	4-2区 北壁16層	小石	軟質	2.5Y8/1灰白色	
100	剣頭文軒平瓦	4-2区 池232		軟質	2.5Y7/3浅黄色	
101	右巻三巴文軒丸瓦	5-1区 土坑4	長石少量	良好	N4/0灰色	
102	右巻三巴文軒丸瓦	5-1区 井戸47	小石	やや軟質	10Y7/1灰白色	
103	右巻三巴文軒丸瓦	5-1区 土坑4	クサレ礫・長石・多量	良好	7.5Y7/1灰白色	
104	右巻三巴文軒丸瓦	5-1区 土坑4	砂粒少量	良好	5G6/1緑灰色	
105	右巻三巴文軒丸瓦	5-1区 土坑4	長石	良好	N4/0灰色	
106	唐草文軒平瓦	5-1区 土坑4	小石、白色粘土縞状	やや軟質	5G7/1明緑灰色	
107	剣頭文軒平瓦	5-1区 井戸47	砂粒少量	良好	N8/0灰白色	
108	鬼瓦	5-1区 井戸47	小石少量	良好	N8/0灰白色	
109	鬼瓦	5-1区 土坑38	混入物少なく粗い	やや軟質	N8/0灰白色	
110	鬼瓦	5-1区 井戸47	砂粒少量、空隙あり	良好	N4/0灰色	
111	平瓦	5-1区 溝39	砂粒少量	軟質	2.5Y7/2灰黄色	格子叩き
112	平瓦	4-2区 溝164	長石少量	良好	5Y7/2灰白色	格子叩き
113	平瓦	4-2区 池232汀			5Y7/1灰白色	格子叩き
114	平瓦	4-2区 池232	長石少量	良好	2.5Y7/1灰白色	凹面叩き
115	平瓦	4-2区 池232	長石少量	良好	5Y7/1灰白色	凹面叩き
116	熨斗瓦	4-2区 池232汀	長石・チャート	軟質	2.5Y8/1灰白色	割り熨斗
117	熨斗瓦	4-2区 池232	砂粒少量	良好	5Y7/1灰白色	
118	丸瓦	4-2区 池232汀	チャート少量	良好	2.5Y8/1灰白色	



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・こうりゅうじきゅうけいだい							
書名	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-3							
編著者名	前田義明・尾藤徳行・小松武彦・北野信彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年8月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡 こうりゅうじきゅうけいだい 広隆寺旧境内	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うづまさいちのいちょう・ 太秦一ノ井町・ うづまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町	26100	908  911	35度 01分 03秒	135度 42分 34秒	2008年4月 9日～2008 年6月27日	1360m <sup>2</sup>	立体交差 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居	弥生土器				
広隆寺旧境内	寺院跡	古墳時代		土師器、須恵器				
		飛鳥時代 ～奈良時代	竪穴住居、掘立柱 建物、溝、柱穴、 落込	土師器、須恵器、ガラ ス製品				
		平安時代	土坑、溝	土師器、黒色土器、輸 入白磁、軒瓦				
		鎌倉時代 ～室町時代	掘立柱建物、池、 柱穴、柵、土坑、 溝、井戸	土師器、瓦器、瓦質土 器、石鍋、軒瓦				
		江戸時代	土坑	施釉陶器、焼締陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3  
常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

発行日 2008年8月29日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961